

# 三次創作 とある装蹄師に自覚と反省を促す取材記録

zenra

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

Q なんでこんなモノを書いた、言え！

A 俺に質問するな！

Q 何故、今になって公開しようとしている…

A 安心しろブラザー、生き恥を晒したら消すさ

Q 真面目にナニコレ

A 私にもわからん

学園お抱えの装蹄師の日常の三次創作になる…なるのか、これ？

たぶん、なる

うん、三次創作のようなナニカです

何故か本家に認知されています

あなたの子よ！

ノリと勢いと妄想で出来た怪文書

まあ、うん

見ない方がいい、この先は地獄だぞ

目次

File	16	170
File	15	159
File private detective 5		149
File ??		145
File 14		132
File private detective 4		124
File 13		118
File 12		109
File 11		102
File private detective 3		93
File 10		84
File error 2		76
File 9		68
File 8		59
File 7		51
File error		44
File 6		36
File private detective 2		33
File 5		29
File 4		23
File private detective		20
File 3		11
File 2		5
File 1		1

S e a b i s c u i t . S e c r e t a r i a t . S S	F i l e  1 7	F i l e  e r r o r  3
185	181	174

突然の取材に快く応じて頂き、大変に感謝しております  
早速ですが、件の装蹄師の先生とのエピソードをお聞きしても？

「はい。中央に在籍していたのは短い間でしたが、先生には良くして  
頂きました」

具体的にはどのような？

「ええと、前置きから話させていただいても？」

勿論、是非お聞かせください

「私は、自分で言うのも何ですが、名家の出だったんですよ」

ええ、一族の方々にはG1バも居られるのは存じております

「当時の私は家の名前の重さに色々抱え込んでしまつて、無理が過ぎ  
てしまつて、クラシックに入る事無く終わってしまったんです」

存じております、その時の貴方は専属トレーナーも無く、チームに  
も所属しておられなかったとか

「はい、トレーナーの絶対数が足りないという現実にはまず阻まれ、模擬  
レースを繰り返し返してやつと掴んだチャンスだったんですが、ね（苦笑）  
」その時にしょっちゅう蹄鉄とシューズを駄目にしてしまつて…先生  
に心配を掛けてしまったものです」

と、申しますと？

「普通、幾ら仕事でも連日同じ様に駄目にした物を持ち込まれば良い気はしないものでしょう?」

「なのに、先生はきちんとケアはしているのか? 道具はいくらでも手入れが出来る、替えも効く、だけどお前の脚は替えの利かない大事なモノなんだからな、と」

それはまた、こう言つては何ですが、少々気障な面もあつたようで

「あ、いやいや、そんな事は無いです、というか寧ろデリカシーが足りてないというか、鈍感というか…ええ、本当に」

「時々、変に気が回らないというかですね…自己評価が低いのか、蹴っ飛ばしたくなる事を言われた時もありましたよ」

中々に愉快なお話が飛び出してきそうですが、ここは話を戻して頂いても? (笑)

「あ、すいません。 ええと…デビューは出来たんですけど、どうしても勝てなくて…無理をして走つて、結果は故障」

「日常生活には問題ないんですけどね、レースで走るには不安が残る。そこで一度心が折れてしまつて…」

思い切り踏み込めなくなつてしまつた、というお話は…

「はい、事実です。治つてる筈、そう聞いていても、また故障してしまふんじゃないか…今度はもつと、取り返しのつかない事になるんじゃないか」

「そんな事ばかりが脳裏に張り付いてしまつて」

「それで中央を辞める事を決めて、お世話になつた先生に御挨拶くらい、と顔をだしてみれば」

「先生、私に気づきもしないで真剣に鉄を叩いて、造蹄してたんです」

「何故か眼が離せなくて、仕上げまで見ていたら…その蹄鉄、私のシューズに合わせられてたんですよ」

「もう、走らないかもしれない私のシューズに」

その理由は、何だったんですか？

「レースじゃ走れないかもしれないが、お前が走るのを辞める理由にはならないじゃないか、と」

「これからも生きていくんだ、なら気分転換に軽く走るくらいするかもしれない」

「そして、お前達が走るのに不安を抱かなくていい、不安を減らせるようにするのが俺たち大人の仕事で、義務で、カツコつきたいところなのさ」

「そんな事を言いながら煙草に火をつけて、あ、すまん。子供の前で吸うもんじゃなかったなとか言っちゃう人なんですけどね」

成程、先程おっしゃられていたデリカシー云々は…

「ええ、事あるごとに子ども扱いされましたので」

そうですか、ですが良いお顔で話されておられますので、嫌な思い出と云う訳ではなさそうですね？

「…そう、ですね。大事な思い出です。今の私があ言葉で形作られたとも言えるかもしれませんね」

貴重なお時間と大切な思い出をありがとうございますございました

何かあれば、また取材を受けて頂けますか？

「はい、喜んで。今度は駄目なお話も暴露しちゃいますよ（笑）」

それは楽しみです！

それでは、マイネルライズさん、ありがとうございました

美しい芦毛を長く伸ばした、非常に小柄な女性、マイネルライズさん

彼女はメイクデビューを含む4回のレースで故障、中央トレセンから地方へ転出後、サポート課へ編入

卒業後も外部委託としてトレセンのサポート課で後輩達へ指導をする傍ら教員を目指しているそうです

次のインタビュー予定は…



「おまたせしました、今日はよろしくおねがいします」

はい、お忙しい時期にすみません

どうしてもお話を伺っておきたくて…

「構いませんよ、先生の話を聞きまわってるという噂は流れてきてましたし」

そうですか、では、改めてありがとうございます

それでは早速お話をお願いします

「はい、御存知の通り私はG1での勝利はありませんし、重賞でなんとか勝てたくらいのウマ娘です」

御謙遜を…

G1に出走出来る一握りに入っただけでも相当なものですよ？

「ふふ…先生と同じ事をおっしゃるんですね」

とぅとぅとぅ

「ダービー、菊花賞と惨敗を喫した私に、先生は…あの人は同じ言葉をかけてくださいました」

「一年の休養を挟んでの富士Sに挑む前日に、なんてこと無いようにあの人は言いましたよ」

「勝つただけじゃなくて、走るのが好きだから戻ってきたんだろ？

なら、精一杯楽しんでこい。」

「なあに、お前さんはG1に出たくても出れない奴らの先を走ったんだ、相当な奴だつて知ってるよ」

「なんて言いながら私の頭を撫でるんですよ？ 緊張してたのがバカみたいで（苦笑）」

それはまた、イタリア人ですかね？

「その割には最後まで子供扱いでしたけどね」

おや、そうなんですか？

「ええ、私は見ての通り、結構スタイルには自信があつたんですけど」  
「あの人、私と話すときはいつも目をちゃんと合わせて話してくれましたよ」

「流石に一切意識されなかったのは、ちよつと…いえ、かなり悔しかったですけど」

ええ…今は少し伸ばされているようですが、当時はショートカットだった鹿毛とクツキリした目鼻立ち

加えて均整の取れたボディラインはモデルの話もあつたと聞きますよ？

「あー、たしかに有りましたねえ。断りましたが」

「私は走る為に日本に来たんだから、つて」

確かに

現役時代の貴方は闘走心の塊みたいなレースをしてましたからね  
特にトーセンジョーダンさんやナカヤマフエスタさんとのレースは激しかった…

「あ、あのレース観てくれてたんですね、ありがとうございます」

「あのレースは何が何でも勝ちたい！って我武者羅だったんですよ。デビューはいい勝ち方が出来たんですが、続くいちようSでは4着でしたから」

「私は脚部不安を抱えていましたから、蹄鉄もシューズも既製品をかなりカスタマイズして使ってたんですが、あの人：先生にお願いして結構攻めたモノを用意してたんですよ」

ほう？

彼は装蹄師ですからカスタマイズはわかりますが、用意、ですか？

「ええ、一応所属上の上司って事でシューズ関係にも話が通せるからって、私の願いを聞き届けてくれたんですよ」

ははあ、甲斐性がありますねえ

下心ナシでそれって、逆に凄いですよね…

と、話がそれましたね

攻めた、といますと？

「強く踏み込んで思いつ切り走る、シンプルにそれだけ追求してもらったんですよ」

それはまた、納得というか、潔いですね…

「結果はクビ差でしたけど手応を感じましたね、続く朝日杯FSで馴染んで、NHKマイルCでは念願の勝利を掴ませてくれた、良いシューズと蹄鉄でした」

ははあ、つまりその辺りで彼にお世話になっていたと

「ええ、もう通い詰めてました（笑）」

「ただ、御存知のようにダービーでは惨敗してしまいましたし、その後

も結果は奮いませんでしたが」

いやいや、朝日CCで二着取ってますよね？

それで奮わない結果というのは…

「あー…そう、ですね。悔しい負けだったのですがどうしても…」

「まあ、今のは少々自虐的でしたね、スママセン」

いえいえ、お気になさらず

では最後に、言い辛いかもしれませんが、復帰戦が引退戦となってしまった富士S

あの時の貴方は何故笑っていられたんですか？  
痛みなり、違和感なりあったのではと思うんですが

「ええ、違和感は有りました。痛みも。」

「それでも、いえ、だからこそ、私はキチンとレースを走り切れたことが嬉しかったんです」

「内心、もう走れないな、と思っていたのは事実ですけどね（苦笑）」

それでは、何故？

「走れない事と走らない事は同じじゃない、先輩があの人に貰った言葉を私も知っていたのと…」

「なんとなく、レース前からですけど、これが最後かなって感じてたんです」

「それで不安と緊張を抱えてた私にさっきの言葉をあの人 gave くれたんですよ？」

「無事に、笑顔でレースを終えないと、あの人泣いちやうんじやないかって（笑）」

「結果としてレースでは走れなくなりましたが、軽く走るくらいならできますし、ね」

「私はその人の手が守ってくれたからだって勝手に思ってます（穏やかな笑顔）」

そうですか…

それでは長々とありがとうございます

「いえいえ、私も当時を思い出して結構楽しかったですよ」

あ、すいませんもう一つだけ良いですか？

「？ ええ、いいですよ」

引退後、リハビリを終えてからの進路がカートレーサーだったのは何故なんですか？

「ああ、それはですね」

「やっぱり、場所は違えどレースで競い合いたいと思ったのが一つ」

「あの人が気分転換にと連れて行ってくれたサーキットで、モーターレーシングに惹かれたのが一つ」

「あの人が、クルマが好きだから、というのが最後の理由ですね」

「これ以上は黙秘します（笑）」

おお、最後にぶっこんできましたねえ…

ともあれ、ありがとうございますブレイクランアウトさん

少し癖のある鹿毛をセミショートにまとめた、所謂モデル体型のブレイクランアウトさん

10戦2勝とはいえG1出走経験を持つウマ娘でしたが、残念ながら復帰レース後に右浅屈腱不全断裂を発症、引退されました

引退後は厳しいリハビリも乗り越え、カートレーサーに転身、現在

は世界チャンピオンを狙ってシリーズ挑戦準備中とのこと

次のインタビューの予定は…

ああ、まさか貴女への取材が叶うとは…

というかあの装蹄師さんが中央へ赴任する前に卒業・引退されていたと思うのですが…

一体、どのような御縁が？

「えっと、その前に何故私を拜んでるんでしょうか…?」

私、貴女の大ファンなんです！

グッズも全部揃えてますよ！

なんせトウインクルシリーズ成立後、平地競走最多連勝記録保持者ですよ！

確かに障害も含めれば11連勝された方もいらっしやいましたが、クラシックの二冠までも含んでの平地競走のみでの大記録ですよ!?

かのシンボリルドルフやマルゼンスキーですら連勝は8！

これがどれほど偉大な記録なのか！

「わかった！わかりました！だから落ち着いてください！お願いしませうからあ!!」

…あー、大変申し訳有りませんでした

もうこの際なんで申し訳ついででサイン、お願いしても？

「あつ、はい、書きますから…だから落ち着いて、近いです!」

おっと…ええ、はい。

ありがとうございます、家宝にします（恭しくケースに保管）  
いきなりの脱線、申し訳有りません

えー、ゴホン

それでは、装蹄師の彼とのエピソードをお聞かせ願えますか？

「はい。と言っても余りいい出会いではなかったような気がしますけど…」

「当時の私は、学園を卒業して一人暮らしを始めたばかりだったんです」

「今でこそ落ち着いてますけど、あの頃はまだ対人恐怖症に近い感じだったんですよ」

引退後に、現役時代は対人恐怖症を患っていたと知った時は驚きました

貴女のデヴューからレースは観ていました、あれほどの走りで競い合っていたヒトが、まさか、と

「レースの時は特注のマスクで視界を制限していましたから、それだなんとか（苦笑）」

「話を戻しますね？ 一人暮らしを始めたと言っても、特段仕事を始めたとかじゃあ無かったんです」

「ただ、レースは思いつ切り走り切ったから、暫くのんびりしたいなつて」

「それでも学園の近くに借家を見つけて借りていた辺り、心の何処かでレースに未練があったのかもしれないね」

それは…もしかして、屈腱炎で回避した菊花賞、ですか？

「そうかも知れませんが、違いかもかもしれません。 わからないんですよ、今でも、私自身にも。」

「まあ、そんなフワフワしたような心持ちで新生活の準備を整えていたんです」

「あのヒトと出会ったのは、借家に荷物を運び込んで、生活用品を買い



に行ったときでした」

おお？　　こういっては何ですが、ベタな出会いだったのでは…？

「かもしれないんですが、さつきも言ったようにあんまり良い出会いではなかったんです」

「私って小さいですけど、ウマ娘ですからね、相応に力はあるんですよ」

「ただまあ、荷物を抱えすぎていて、ですね…少々ガラの悪い人達にぶつかってしまって」

「あー！　でもその、見た目と口調がそうだっただけで、悪い人達じゃなかったんですよ！」

「ただその、ちよっぴり怖くてですね…ちよっぴり、ほんの少し、極々わずかにですけど涙ぐんだ感じになってしまったんですよ」

あー…

まあ、未成年で女子校でもあるトレセン学園を卒業したばかりな上に对人恐怖症だったんでしよう？

仕方ないのでは？

「うぐぐ…コホン　兎も角、そんな場面にあのヒトは現れたんです、ひっどいセリフと共に」

えっ

「オウ、おめーら何子供泣かせてんだ。　あ？ぶつかってこられただけで何もしてねえ？　　ばーか、子供が荷物ひっくり返して転んでるんだ、助けてやれよ」

「お嬢ちゃん、悪かったな。　コイツラも口とツラはワリイがあぶねー奴らじゃねえんだ、許してやってくれねーか？」

「なんて言いながらナチュラルに私を抱き起こして言うわけですよ」

「自慢になりますけど、当時の私ってマスク装着した見た目もあって、結構な知名度があつたんですよ」

「当然、その時もマスクはつけてたんですけど、一切、微塵も、まっつたく知らない感じで接して来てですね」

「しかも子供扱いですよ!? 確かに身長は143センチしか無かったですけど…自分だつてヒトに言えないくらいには強面感あつた癖に酷いですよね!」

あー、赴任するにあたつて、教員としての勉強やらも覚え直してたそうですから、本当に忙しくて観ていなかったんでしょうね、レースを…

あと強面というか、まあ、はい、笑うと野生動物みたいな顔になるヒトですよ

「気づかなかつたのはまあ、良いんです。問題は私を小さい子供扱いしたことですよ!」

アツ、ハイ

「その時はなんてデリカシーの無い人なんだろう、って」  
「強く思っていましたね、ええ」

ハハハ…それで、ファースト・コンタクトはそれで終わったわけですね

「ええ、まあ。 次に出会ったのはちよつと意外な場所でしたね」

と…

「薬局です」

「私は文化的に読書してたら、ちよつとだけ目が辛くなったので目

薬を買いに行つたんですが」

「あのヒトは仕事場で使う応急処置用の薬品や包帯なんかの補充だったらしいです」

「で、目があったら軽くしやがんで目線を合わせて」

「今日は泣いてないんだなお嬢ちゃん」

「なんて言うんですよ？あのヒトの中の私のイメージってどんだけ小さな子供だったんですか!？」

Oh…

「正直、ほんつとにデリカシー無い人だなって思いながら、脛を蹴っ飛ばしてましたよ、軽くですけど」

「慌てて悪かった、冗談だよ冗談！つて叫んでたのを見て、少し気が晴れたので許してあげましたが」

「それから雑談をして、別れて」

「落ち着いて考えたら、不思議だったんですね」

不思議、ですか？

「ええ、私の対人恐怖症が出てなかったんです」

「家族や友人以外では、というか父以外の異性では初めて怖くないヒトだったと思いますよ」

ええ…

あのヒトなんか妙なフェロモンでも出してるんじゃないですか…？

「あー、それはあるかもしれませんがね、なんか落ち着くというか、安心？気楽？ ううん、気が抜ける感じ？ の匂いがしましたし」

「とと、脱線しましたね、戻しますよ」

「それからは生活圏が被ってるのもあって、週の半分くらいは出先で

会って、少し立ち話をして別れる顔見知り、のような関係になりました」

「もしかしたら、あのヒトは年の離れた友達のように思ってくれていたかもしれないね…」

なお実際にはほんの少し歳下なだけだった、と

「年のことは…ね？（威圧）」

ハイ！

「兎も角、そんな日々を半年程過ごした辺りで、私の認識が変わる転機が訪れたんです」

と、言いますと？

「私のマスクは目の部分を覆う作りになっていて、視界を制限することで対人恐怖症を緩和してたんですが」

「視界を制限する、という事は死角も多くなるという事です」

「まあ、その、お恥ずかしい話ですが、あのヒトとの話が愉しかったので、注意力がですね…」

あつ、なんとなくこの先が読めましたよ？

「はい、多分御想像の通りですね。 ちょっとしたトラブルでマスクが壊れてしましまして…そうしたら途端にあのヒト以外が怖くなってしまうって」

「涙目になりながらパニック寸前になっていたんだと思います」

（多分涙目どころか泣き出してパニックになったんだろうなあ）

「あのヒトがギュツと手を握って、俺を見る、俺だけ見てりや怖いもんなんて見えねえだろ、って」

「私が対人恐怖症だって、あの人には言っただけでなかったんですよ？ それなのにサラツと助けてくれちゃって…」

「掌の暖かさを感じて、あの人の真剣な目を見て、少しずつ落ち着いて、でも動けなくて、どうしようって思ってたなら」

「ちよつとだけ勘弁な、後で文句は受け付けるから良いぞって言うまですみませんって言い出して」

「返事をする前に私を抱き上げて、私はわけも分からずあのヒトにしがみついて、目をつぶってました」

「ほんの数分間あのヒトの腕の中で揺られて、案外がっしりしてるんだな、とか、落ち着く匂いだな、とか色々混乱してるうちに、良いぞと言われ」

「目を開けたらなんだか可愛いクルマが目の前にあっただんです」

あ、一部で噂になってるサーキットでちよつと頭おかしいコーナーリングを見せる例のクルマですね

「え、なにそれ私知らない」

ままままま、それはさておき続きをどうぞ

「ええ…コホン ええと、そのクルマから少し古びたサングラスを取り出して、私に掛けながらこういったんです」

「俺のお気に入り、お守り代わりに手元に残してたヤツなんだが…とちよつとチエーン使って掛けとくから、眼鏡屋でレンズとフレーム調整してもらいな。マスクの代わりにやちと頼りないかもしれんが、お守りとしちや俺のお墨付きだぜ、って」

それって、今かけてらっしゃるメガネの？

「ええ、このメガネがその時のモノです、流石に色々いじってますけどね?」

「ははあ、流石は男性観の破壊者ですね」

「え、なにそれ私知らない」

「あ、こちら今までのインタビュー原稿です」

「」

「あつ、表情が抜け落ちた…」

「まつ、まあ? 別に私は男性観破壊されてませんし?」

「おつ、そうだな」

「むう…まあ、いいです(男性とお付き合いとか考えたことも無かったですし)」

「兎も角、先程述べた出来事が切っ掛けになったのか、私の対人恐怖症は改善していきました」

「それから暫くして、私の実年齢を教えたら顎が外れてるんじゃないかってくらい驚いてて笑いましたけどね」

「あのヒトは装蹄師として忙しく働き初めて、私も請われて中央・地方問わずに非常勤教官として飛び回り始めましたからね、今では偶に顔を合わせる程度ですけど、今も気安くやれてます」

「もつとも、あのヒトはデリカシーが致命的に足りてないと思います  
が!」

「なあ〜にが、ちつとは肉付き良くなったじゃないか、成長してよかったですなあ? ですか!」

「まあ、少し髪型変えたり、アクセサリ変えたりしたら必ず気付いて

くれますけど…」

ハハハ…今日はお忙しい中、長い時間ありがとうございます  
あとサインは未代まで伝えていきます（真顔）

「ええ…そんな大層なものでは…」

間違いなく大層な代物です（真顔）

それでは、また機会が在れば宜しくおねがいます  
是非とも、是非とも宜しくおねがいます

「アハハハ…はい（腰が引けつつ苦笑）」

では、カブラヤオーさん、本当にありがとうございました

艶やかな黒鹿毛をなびかせ、畏怖をもつて狂気の異名を通り名としたカブラヤオーさん

メイクデビューでは惜しくも2着と破れましたが、未勝利戦から連戦連勝

その勢いのままに皐月賞、日本ダービーのクラシック2冠を手にしましたが、屈腱炎を発症し、菊花賞を回避、3冠は幻と消えました…  
ですが一年間の休養明けでオープンクラスとはいえ、1着、これももつて平地競走前人未到の9連勝を達成

クラシック期には年度代表にも選ばれるというまさに名バ、というべきウマ娘

総合戦績13戦11勝で、着外はただの一回だけ

屈腱炎の再発が無ければ、そう思わずには居られなかった凄まじい戦績です

さて、次のインタビューは…

やれやれ、私は記者で探偵じゃないんですがねえ

今回は証言を集めて纏めてありますが、まあ、雑なのはご了承下さいね、クライアント様

装蹄師の彼が御老公と呼び慕う師の許に通い詰めていた時期

彼を兄と慕うシンボリドルフとの出会いがあったという情報は御存知でしたね

ですが、同時期に栗毛に見える小さなウマ娘との出会いがあった、調査の結果判明しました

どうやら、保護者と逸れたのを保護したようですね

その時は保護者と思しき壮年の男性に引き渡して別れたようですが、後日同じ場所で待ち伏せていたところまで目撃証言が取れています

目撃者は道端で座り込んでいる少女が気になり、声を掛けようかとしたタイミングで彼が保護して、保護者に引き渡すまでを見ていたのだそうです

背中辺りまで届く綺麗な髪と、何処か神秘的にさえ見える雰囲気があったので印象に残っていたのだとか

別の証言からは、後日待ち伏せていた…というか、接点も何も無かったからそこで通りがかるのを待つしか無かったと思われる少女が、数時間道端に居たのを記憶していたと

数日間、昼頃から夕方まで、連日居れば記憶にも残るでしょうねえというか彼はウマ娘ホイホイか何かなんですかね？

会話の内容が掴めないのではつきりとした事は言えないんですが、何となく内容に想像がつくんですけど

まあ、それを差し引いても一度会っただけの人物を連日待ち続けるとかちよつと怖いです



さておき、こうして再会した彼と少女は、保護者の男性が迎えに来るまで静かに話をしていたそうです

ここから数日おきに彼は少女と会って、話すようになるんですが……  
どうも、証言からすると少女は毎日のように待っていたらしいですね

彼が来るかどうか分からないのに、です

流石に肝心な時以外は割と勘のいい彼は10日程で気づいたようですが（間に数日のスパンを挟んで、あった回数だけなのですが）漸く自分が顔を出せる日を告げるようになったようですね

このころになると目撃者は心配で見守っていたそうです

あ、目撃者は現場の目の前にある喫茶店のマスターだそうで、丁度カウンター越しに窓から見える位置でやり取りが目に入っていたのだとか

当時は少女があらわれると仕事そっちのけで見守っていたとか……  
控えめにいつてこの人も馬鹿なのでは……？

ともかく、彼と会うのを心待ちにする少女……といううちよつとポリスメン案件一步手前な状況も3か月程で終わりを迎えたとか

偶然、目撃者曰く偶然、店舗前の掃除をしていた時に漏れ聞こえた会話の内容が少々うる覚えですがまとめてあります

他県へ引越すので、もう会えない

もっと一緒にお話ししていたかった

おじい様と同じくらい好きでしたよ

というのが少女の言葉らしいですね

今までシープ？シップ？が世話になった

もし、どこかでまた会ったら、この子に良くしてやってくれ

本当に、ありがとう

というのが壮年の男性の言葉だそうです、名前の辺りは良く聞こえなかったそうで

お嬢ちゃんが将来レースに出るウマ娘になったらまた会えるかも  
な

その時はまた話しぐらいできるさ

蹄鉄やシューズの面倒も纏めてみてやるから安心しな

と、なんかコイツ地雷設置してんじやねえかなあつてのが彼の言葉だそうですね

で、挨拶を交わした後、最後にしゃがんでほしいとお願いされて、少女とハグをかわして、別れたようですが

ハグした時にうひょうとか叫んでビクンとしてたので何処か舐めるか何かされたのではないか、というのが目撃者の談です（丁度見えない側だったらしい）

いやはや、それなりに古い話を掘り起こして調べるのがこれほど面倒だとは思いませんでしたよ

そうそう、少女は栗毛で額の上あたりの髪に星のような形で白毛が一房あつたそうですね

とはいえ、御存知のように幼い頃の栗毛が現在も栗毛であるとは限らないのがウマ娘の不思議ですよねえ

芦毛のウマ娘のほとんどは、幼い頃は違う毛色だった、という話もありますのでね

結局、今回の調査で判明したのは過去に知り合った少女が居た、という部分しか確定できませんね

しかし、URA幹部つてのは妙な調査を依頼してくるものですね？ ああいえ、詮索するつもりは無いですよ

インタビューでのアポにも御協力頂いてますからね…  
ですが、コレ以上詳細になると専門の探偵でも雇った方が建設的

でしょう

では、失礼します

今回は突然の取材に快く応じて頂きありがとうございます

「いえいえ、今は忙しくしている訳でも無いですからね」

そう言っただけでありがとうございます  
ですが忙しくない、というのは？

「ああ、今の仕事はシーズン以外だと余り忙しくないのです」

ええと、確か御実家の旅館を継いだとか

夏の合宿シーズンになると学園の生徒であふれかえっている、と聞いています

「ええ、いわゆる若女将ってやつですかね？（笑）」

「リギルやスピカの一流どころじゃなくて、新人さん達でも気軽に泊まれるようにしてみましたら大当たりしまして…」

「理事長から直々にシーズン毎の契約にまでなったのは想定外も良いところでしたが（遠い眼）」

あー…学園の生徒の大半はトレーナーがついてない、という現実に対して、せめて教官同伴での合宿くらいはと提案したそうですね？

収容人数パンパンになるほどだとか

「ええ、まあ、シーズン中だけはアルバイトも増やしてるんですけどね」

「トレーナーを目指してる人達が口コミで聞きつけて募集に駆けつけてくれたので何とか回ってる感じです」

「いや、ホントに…私はトレーナーさんが居たのでピンと来てなかったんですけど、みんなチャンスを掴むために必死なんですよね…」  
「収容人数の関係で、上級生の希望者からになってしまうのが申し訳ないくらいですけど」

「いえいえ、貴女が始めたこの取り組みは少しずつですが広がっています」

「ゆつくりと、ですけど合宿に辿り着けるウマ娘は確実に増えています」

「ですから、そこは誇っていいと思いますよ？」

「…私が走っていた頃より、レースも増えましたからね。後輩達が、そのゲートに辿り着く手伝いが出来れば、嬉しいですね」

「大きな短距離レースが少なかった時期ですね」

「結果として有力なプリンターが集中して潰しあいの様相を呈していたのは、惜しいと思いました」

「もう少し短距離レースが多ければ、或いはプリンターとしての結果を出すウマ娘は増えていたかもしれませんね」

「まあ、そのへんはたられればでしかないですがね。私も34戦して7勝しか出来ませんでしたし」

「いやいやいや、G3とG2で見事に勝利してるじゃないですか！」

「G1レースでもプリンターズSであるサクラバクシンオーさんを筆頭とした強力なプリンターとしてのぎを削り、入着していらっしやる」

「これは十分に誇れる結果ですよ！」

「ありがとうございます、でも、私はあの娘達に勝ちたかったんです」「スプリンターズSという、最高のスプリンターが集まる場所で」

3回の出走でぶれなかったタイムにハイペースがマイペースと言われてましたね

勝利したレースからマイラーだと思われていたそうですが？

「マイルにあの娘達が出てこなかったから勝てただけですよ？」

（そんな台詞が真顔で言える辺り、本人の意識はスプリンターなんです…）

いやあ、出走した面子も結構なものでしたから…

「ええ、速かったし強かったと思いますよ？ でも短距離でのあの娘達ほどじゃなかった…あの娘達のような怖さが無かった、と言う事ですよ」

怖さ、ですか？

ハナをとつても取らなくても逃げ続けたマイペースな貴方からそんな言葉が出るとは

「いやいや、マイペースでも怖いものは怖いですよ（笑）」

「ペースなど知ったものかと爆走…ええと、バクシン？でしたっけ、する彼女は私のペースまで破壊しかねない怖さもありましたし」

「追い込みや差し脚も、私をペースメーカーに出来る相手だとやっぱり怖かったですね」

なるほど…

しかし、なんでまたスプリンターに拘ったんですか？

幸い、マイルでなら十分に力を発揮できていたと思えるのですが

サクラバクシンオーさんを筆頭に、ニシノフラワーさん、バンブーメモリーさん等の超強カスプリンターと同世代だったので、回避する選択肢もあったのでは

「だから、ですよ」

は？

「最高峰のスプリンターが集った世代、なら挑戦するしかないでしょう？」

「勝てる勝負を選ぶのも選択でしょう、でも私は、私が選んだのはそうじゃなかった」

「ウマ娘と産まれたからには、誰もが一度は夢見る、地上最強のウマ娘」

「私はそれを目指し、阻まれた。それだけですよ（笑）」

ね  
おおう…思ってたよりずいぶんと凄い理由が飛び出してきました

「私たちは1着を目指して走る、それがレースの一着だけじゃなかった。それだけですよ？」

「まあ、私も先生に言われて成程と思ったんですけど」

おつ、彼の話ですね？

それが聞きたかった！どうぞ、続けてください！

「えっ？ ええ…良いですけど…一着を目指して走るんだから、最終的にテツペンを目指す事に変わりはない、だったら最強を目指した方がいいだろ」

「無敗でも無敵でもなくていい、あいつが一番だって言われるような最強を目指すのに資格も何もないだろ」

「だから、納得いくまで走ってみろよ、と」

それはまた、随分と男の子なご意見ですねえ（苦笑）

「ええ、でも可愛いとおもいません?」

「それに、私たちが走る理由、一番になるという思いは、確かに最強を目指すものかもしれないなって」

「それもあって、納得いくまで走ったんですよ（笑）」

それで、納得したんですか？

「ええ、私じゃ届かない事にも納得しました。　すつごく悔しかったですけど」

「代わりに、私が出来る事で最強を…一番を目指す子を手助けしたくなっただんです」

その答えが、先程の？

「ですね、そうなります（笑）」

「それだけが理由って訳じゃないですけどね?」

ほほう?!

その理由は伺っても?!

「これはナイショですね、流石にこういう場所で言う事じゃないですから」

あつ（察し）

ええと、はい

それでは、取材に御協力頂きありがとうございます、ナルシスノワールさん

今度は合宿の時期にでもお会いするかもしれませんね?!

「流石に忙しいのでその時期はお話しできるかわかりませんが（苦笑）」

わかってます（笑）  
それでは、失礼します

輝くような艶を持つ黒鹿毛の逃げウマ娘、マイペースハイペースなナルシスノワールさん

大きなレース数の少ない短距離で、有名どころのスプリンターと鎬を削りあつたウマ娘です

彼女の幸運と不幸は短距離版黄金世代とでもいうべき面子が揃っていたことだと、私は今回のインタビュウで感じました

もし、主戦場がマイルであつたなら、もし、世代がずれていたら  
或いは、名バとして名前を残していたのは彼女だったかもしれませ  
ん

さて、次のインタビュウは…



えー…今回の取材、本当に受けて良かったんですか？  
無理して無いですか？

「いえいえ、聞かれて困る事も無いですし」

は、はあ。

いや、此方としてはありがたいんですが…  
では、改めまして  
よろしく申し上げます

「はい、お願いしますね」

ええ、と

本題に行きますが、最近中央トレセンでの故障した・故障の恐れがあるウマ娘の為に、陰に日向に動き回っている一団の中心的人物  
装蹄師の彼とのエピソードをお願いしてもよろしいですか？

「あら、先生ったら派手にやってるんですね」

いえいえ、まだ派手と言えるほどではないですが、それなりに噂になる程度には動いてるようですよ

「相変わらず誰かのために抱え込んでるんですね、先生…」

相変わらず、というと？

「私の最後のレースは御存知ですか？」

エリザベス女王杯ですね

第三コーナーでバランスを崩して、そこから中団から脱落、右足を引き摺るようにながらも最下位でゴール

レース後の診断で繋靱帯断裂が判明、そのまま引退発表となりましたね…

「元々最後のレースとして発表はしていたんですが、ね」

「結果としては脚を壊して引退というイメージがついてしまったのだけは残念でした」

失礼かもしれませんが、現在は怪我の具合は？

「日常生活には不便しない程度には」

「流石にレースの時みたいなの走りは無理ですけどね（苦笑）」

それは…こう言っただけですが、良かったです

自分では歩けなくなる方も少なくない症例でしたから

「ご心配をおかけしました、というべきですかね？」

いいえ、元気な姿が見れたんです、それがすべてですよ！

「そうですか？ それならよかったです」

「ええと、話を戻しますと、リハビリの合間とかに先生は良く顔を出してくれました」

ほう？

「といいますとまたイタリア人みたいなことしてたんですかね？」

「イタリア人？ いえ、普通にお見舞いですけど」

「ああでも、先生が彼を連れてきてくれたのはうれしかったですね」

彼？

「これ言っちゃっていいのかな…？」

「プロ野球のユタカ選手です」

フアーツ!?

「当時はまだお互いに一番仲のいい異性の友人って感じだったんですけどね？」

「リハビリを始める前後でお付き合いをはじめまして…」

えっ、ちよっ、まっ

「元々、トレセンに入る前から知り合いではあったんですけど、京都レース場で再開してから連絡取りあって、会うようになりまして」

「お互いに目指すモノに向けて頑張ろうって、励ましあったりしたんですよ」

「で、まあ、その際に色々先生にお手伝いとかしてもらいました(笑)」

ヤバイヨヤバイヨ…これ聞いちゃダメな奴だよ…

「で、私の入院先に身内でも関係者でもないから来れない感じだったんですけど、先生が気を利かせて連れてきてくれてですね」

「そこで、死ぬほど心配してくれたのを聞かされて、遅いかもしれないけど一緒にいてほしいって言われてですね…」

「その、結婚を前提にお付き合いを始めたんです…」

アツ、ハイ

「あの、大丈夫ですか？ 凄い顔色になってますよ？」

いえ、大丈夫です

大丈夫なんです、大丈夫に決まってるじゃないですか  
でもこんな特ダネ握りたくなかった（小声）

「？ ええと、それならいいんですが」

「それで、他に何か聞きたいことはありますか？」

いえ、そうですね…

今回はこれで十分です、ありがとうございます  
シャダイカグラさん

「いえいえ、こんな話で良ければ何時でもいいですよー」

ハハハ…まあ、機会があればまたお願いします

それでは、ありがとうございます

栗毛をなびかせ桜下に舞った名バ、シャダイカグラ  
ティアラ路線の一冠、桜花賞含む11戦7勝、G3、G2、G1を  
一つずつ勝利し

引退レースでは悲運の繋靱帯断裂に見舞われたものの、怪我自体は  
順調に治り、今では日常生活に不都合はないそうです

なお、何故か大型二輪免許を何時の間にか取得していた事が発覚  
現在は二人乗り解禁が待ち遠しい日々だそうです

そしてプロ野球のユタカ選手と交際中との事です…これ、ホントに  
書いていいのかなあ

（後日、関係各位にお伺いを立てたところOKが出ました）

さて、次のインタビューは…

ええ：なんで追加調査って形にするんですかね：

いや、インタビューに行くより冒にやさしいですけど

え、単にフアンだから知りたい？

いや、ギャラ弾んでもらってるから文句はないですけど、ええ：

えー、取り敢えずインタビューで判明した京都レース場での再会からの調査結果ですが

連絡は頻繁に取り合って、週一程度の頻度で直接会ってたようです

ええ、毎週休みのたびにですね

参加したレースが京都と阪神だけなのもこうしてみると：：その、ねえ？

逢いやすいからなのかなあ、とか思えてきますよね

それだけじゃないのは解ってるんですけど

色々と妄想の余地がありますよね、ええ

ええと、装蹄師の彼が関わり始めたのもあまり変わらない時期のようですね

元々は脚部不安を抱えていたシャダイカグラさんが相談したのが始まりのようですが

何故か相談内容が激変したようですね、本当に、何故か

当時の在校生から聞き取りした結果、彼はユタカ選手とシャダイカグラさんのデートを手引きしていたようですね

え？ 何で在校生が普通に知ってるんだ、ですか？

進路がマスコミ志望の親戚が居ましてね：：ええ、ホント、偶然とはいえ都合よすぎてポンポン痛いです：

ああ、その子は将来マスコミ、というか記者になるために周りの変

化なんかを常に気にしてたらしいですよ

で、偶然目撃してから密かに手助けというか、邪魔が入らないように奮闘してたそうです

何故、ですか？

その子、シャダイカグラさんの大ファンなんですよ（死んだ眼

推しの為なら常識も限界も超えられるのがファンなんだそうです

（震え声

さておき、続き、いいですか？

プロ野球選手として頭角を現し始めた彼に配慮して、というのがメインのようです

ゴシツプのネタにされてしまうのは不憫だとも思ったのでしようかねえ

そうやって彼自身もユタカ選手と年の離れた友人のようなポジションに収まったようですね

なんというか、男女問わず仲良くなるの速いですねこの人…

ユタカ選手の移動等もある程度手伝っていたようで、何度か例の車で高速道路に飛び乗って送迎した形跡がありました

そうやって仲を深めた二人がお付き合いを始めた、お見舞いの一件ですが

どうやら学園関係者枠で連れて行ったようですね

此方は病院側で雑談の中から拾ってきた情報です

現在は相談されない限りノータッチ、という感じで見守っているようです

この流れだと仲人か友人代表辺りでスピーチ頼まれるんじゃないですかね、あの人

絶対結婚式場で引つ掛けて帰ってきますよ、無自覚に

ともかく、現在までシャダイカグラさんとユタカ選手は健全なお付き合いをしているようです（ハグとキスマまでなら健全ですよ）

未成年とはいえ、年上のユタカ選手が分別と理性のある、きちんとした人で良かったですね…

え？

そんなの当然？

アツ、ハイ

それでは、今回の調査はこんなもので打ち切っていいですね？

はい、ではまた

トレーナーとしても優秀とはいえ、やっぱり人の子なんですねえ…

(小声)

ええと…良いんですかね、ここでインタビューとか…

「ええ、私が経営してるお店ですし〜?」

「週の半分は閉めてるんで何も問題は無いですよ〜?」

いやあ、完全予約制で現在3ヶ月後まで予約が埋まってるという話ですし?

「あ、昨日4ヶ月後まで埋まりましたよ〜」

ヒエツ

あー、気を取り直しまして

本日は快く受けていただいて、ありがとうございます  
早速ですが色々とお話を聞かせていただいても?

「は〜い、ど〜んど〜ん、聞いてくださいな〜」

まずは、個人的にすごく気になってたんですが

トレセン学園に入学して中等部からシリーズに出走、シニア期まで走って引退、そこから学園を去り

調理師免許取得、更には調理関係の免許や資格を片っ端から取って自分のお店を開いて、と

凄まじい経歴ですよね?

「あ〜…頑張ったんで〜(笑)」

ええ、その一言で終わります? (苦笑)



「ん、じゃあ順をおって行きましようか？」

是非

「私はトレセン学園に入学しましたが、他の子みたいにレースが一番じゃなかったんですよ」

「勿論、走るの好きですし、レースで勝つととっても嬉しかったんですよ？」

「でも、私はレースで勝つよりも、誰かの笑顔が好きで」

「レースでたくさんのヒトを笑顔にするよりも、もつと近い距離で、目の前のヒトを笑顔にしたかったんですよ」

その、近い距離というのがカウンター席しか無い、あのお店ということですか？

「はい」

「元々、お母さんの手伝いとかで料理をするのが好きな子供だったんですよ」

「それで、忙しいお母さん達にご飯を作って、食べてもらった時のありがとうと笑顔が大好きだったんですよ」

「トレセン学園に入ったのは家から近かったのと、お母さんがやってみなさいって、背中を押してくれたからなんですよ」

（近かったからで合格出来るようなレベルじゃなかったはず何ですが…）

なるほど、中等部から全寮制ですが、御実家が近いならお母様に会いに帰るのも比較的楽だったでしょう？

「え？　なんで毎週お母さんに会いに帰ってたのしってるんですかあ？」

(Oh…)

ハハハ…そこは一応、私も記者なので、下調べも多少はしてありますとも

「凄いですねえ〜」

「えっと…そうそう、入学してからなんですけど、私トレーナーさんが付くのは遅いほうだったんですよ、ついた子達のなかでは多分、最後のほうだったと思いますよ〜?」

えっ?

確かにジュニア期は出走せずにデビューもクラシックに入ってからでしたが

(※ここではアプリを参考にデビュー出走登録〓ジュニアではなくリリース出走登録初年度〓ジュニア期としております)

「はい、二年目に入ったらどうしようかなあ〜って考えてたら、先生が相談にのってくれたんですよ〜」

あ、装蹄師の先生ですか?

「そうなんです〜!私ってちよつと小柄で病気がちだったから、それも含めて相談にのってもらいました〜」

ソウナンデスネー(実際は年末のデスマーチ中に手が空いてる教員が偶々彼だけだった、という話でしたが…思い出は美しく、ですね)

「それで、先生がシューズと蹄鉄を調べて、それからおねえちゃん先生を紹介してくれたんですよ〜」

「それからおねえちゃん先生とお話して、クラシックの春にデビューしようかって決まったんですよ〜」

あの、9バ身差で駆け抜けたデビューは噂になりましたからねえ  
時期が時期ですから判断は結構割れたそうですが

「そうだったんですねえ、知りませんでしたあ〜」

「おねえちゃん先生は次勝てたらその次はちよつと長い距離になるから頑張ろうねって言ってましたねえ〜」

（マイルと中距離はちよつとじゃない気がするんですが…）

「それからちよつと長い距離のレースではまけちゃったんですけど、おねえちゃん先生はこれなら勝てる！って言ってましたねえ〜」  
「その次は走りやすい距離のレースで、ちゃんと勝てたんですよ〜」

（現役時代、唯一取った5着のレースとクラシック級が僅か4人で、残りには格上のマイルレースを随分軽く言うなあ…）

「その次は…ええつと、女王杯？ だったかなあ…2着で負けちゃったレースだったんですよえ〜」

「その次も同じくらい距離のレースを走って、後は走りやすい距離だけ走って引退したんですよえ〜」

G1含むマイルレースで勝利を重ね、その中でも特に、マイルラースCでレコード勝ち、安田記念も勝利、そしてマイルCSで再びのレコード勝ち…そこからの引退は衝撃的でしたね

別段、故障があったという話も無かったので、本当に驚きましたよ  
あのナリタブライアンさんの三冠達成の影でマイルの女王として君臨し、高等部に進級することなくでしたから…当時の関係者は慌てたのでは？

「え〜つと、お料理の勉強したいって先生とおねえちゃん先生に相談

したら、やりたいことがあるならしようがないな、って」

「フーちゃんが進みたい未来へ飛んで行けるよう手助けするのが私の役目だから目一杯応援するわね！って言ってくれましたよ〜？」

随分と思いい切りの良い…（特にトレーナーは相当周りから叩かれたのでは…）

「えっとね、何度か一緒のレースに出た子が言ってたの、目標に向かってバクシンあるのみですよ！って〜」

あつ（察し）

「それから料理の学校に移って〜、頑張って勉強して〜、頑張ってお店開いたんですよ〜」

「お店が出来た時は〜、お姉ちゃん先生も先生も来てくれて〜、お土産までくれたんですよ〜」

「お姉ちゃん先生は〜、なんかスツゴイ包丁をセットをくれたんですよ〜、えっと、堺さんの包丁〜」

（えっ、それ一本で30万とかしちゃうようなヤツだったような…しかもセットって、用途別で揃えてるってことは7桁万円以上!?!）

「先生は〜、魔除けにっして私が使ってた蹄鉄と〜、ピカピカのコックコートを用意してくれたんですよ〜」

「それに〜、二人共私がトレセン学園の厨房に入ったときには顔を出してくれるんですよ〜」

学園の厨房、ですか？

「そうですねよ〜？ お店を開いた後〜、最初はお客さんがいっぱい来すぎちゃって〜」

「その時予約券を配ったのが、今の完全予約制のはじまりですねえ」

「それでえ、先生とお姉ちゃん先生が、程々に休みながらでいいからねって言ってくれて」

「その時一緒にいたゆーあーるえーの偉い人が」

「もし、可能であるならば、学園の厨房に週に一度でも良いので入ってもらえませんかって言われて」

（あれ、何か知ってる人のような…いやいや、まさか、ねえ？）

「それから、週に一回だけ一品だけやらせてもらうようにしたんですよ」

成程、そんな事があつたんですか

ああ、話の腰をおつてしまいましたね、続き、お願いしても？

「お姉ちゃん先生は、いつも厨房に入る日に迎えにきてくれて」  
「貴女は隙が多いから気を付けないと駄目よって心配してくれるんですよ」

「それに、先生もお買い物とかにお姉ちゃん先生がむしよけ？に連れてきてくれたりして」

「いっぱい荷物も持ってくれたりして優しいんですよ」

「特に先生は、食材の仕入れにも付き合ってくれたりして、とっても優しいんですよ」

（おっと、流れ変わった…何時ものだ）

装蹄師の先生とは良く出かけられるので？

「たまくに、かなあ。月に一回あるかないかくらいですなえ」

「あつ、でも」

でも??

「先生の背中みてたらつい抱きついちゃうんですけど、いつつもしょうがないなあって言って撫でてくれるのは嬉しいからよくやりますねえ〜」

Oh: (違う意味でこれ以上は危険かもしれない)

えー、ではそろそろインタビューを終わりにしましょうか！

本日はありがとうございました、ノースフライトさん

「いえいえ〜、今度はお店のお客さんとして来てくださいねえ〜」

よ、予約が取れば是非 (震え声)

小柄な体躯に腰まである長い鹿毛、健康面で難を抱えていながらマイルの女王として君臨し、颯爽と駆け抜けたノースフライトさん

総合戦績11戦8勝、最も着順を落とした時ですら5着、好位追走の王道を行く先行や鋭い差し脚を見せ、鮮烈なレースを見せてくれました

特に安田記念では海外の強豪G1バが犇めく中、二着に2バ身半差をつけての快勝

当時の関係者には、ジャパンカップにも見劣りしないメンバー相手にこれほどのレースをするとは、と驚きと興奮を齎したそうです

中等部卒業と同時に調理師学校へ進学、卒業後はカウンター席だけ、という一風変わったお店を開き、和洋中どころか注文があれば可能な限り作るというスタンスで人気を獲得したようです

勿論、味の方も抜群だそうで、噂では秋川理事長も度々訪れるとかそんな彼女は、週に一度、トレセン学園の厨房で腕を振るうそうです

お世話になったお姉ちゃん先生こと元担当トレーナーや、学園への恩返しの一環、との事ですが、それだけが理由かは…

因みにお姉ちゃん先生、必死の教育で独身男性の部屋に上がり込んだり、お弁当を差し入れるのは簡単にやってはいけない事だと学習したそうです（やってはいけないとは限らない）

さて、次のインタビューは…

私は、一体なにを見せられているのだ…

トレセン学園、ファン感謝祭当日

AM06:25

私は、クライアントから一本の電話を受けていた

朝も早くから、突然の電話で叩き起こされた私の気持ちは、誰もが理解してくれるだろう

そう、まだ寝かせてくれよ、という思いで一杯だった

だがしかし、クライアントが直接電話をかけてくる等珍しい事でもある

もしかしたら、何らかの取材協力でもしてくれるのだろうか…?

そんな事を寝惚けた頭に浮かべながら、ゆつくりと通話ボタンを押した私を、明日の私はどう評価するのだろうか

通話の相手は、クライアント本人では無かった

確か、海外にも帯同していた…ええと、尾花栗毛の子の方かな?

口調が少々キツイが、悪い子ではないが…

何、情報提供?

ファン感謝祭でゲリラライブを内密に許可された一団が居る?

いや、そんな…ゲリラライブt

カブラヤオーさんが出る!?

マジで!!??

確かなんだね?

間違いないネ???

OK、今度何かお土産を用意するから欲しいものリスト用意して  
て

可能な限り叶えますよ!



私は、震える手でゆつくりと通話を切り、深呼吸を一つ  
ステージ使用スケジュールの写しが送られてきたのを確認し、その  
不自然に開いている時間帯がそれだ、と当たりを付けた私は準備を始  
める

そう、あのカブラヤオーさんが再び衆目の前に立つとこのだ、4  
K録画して保存しなきゃなあ？

知人に機材借りてこなきゃ♪

有難い事に、公認取材許可の腕章と名札まで用意してあるという：  
さあ、忙しくなるぞ

時間は少ない、昼前には現地入りして機材をセッティング、正午  
の休憩時間だと思われるタイミングがゲリラライブのタイミングの  
筈だ

先ずは愛車で腕章と名札を受け取ってから、知人の機材置き場を強  
襲だな

AM09:40

機材ヨシ！（強奪しながら連絡をいれた。ギリギリ一人で回せるカ  
メラとマイク）

腕章・名札ヨシ！（ハヤブサで公道を駆け抜けた。幸い事故も検挙  
もされなかった）

問題なく行動を出来る格好、ヨシ！（レンズやバッテリー等の予備  
機材を満載したジャケットとポーチ類）

ふう：さあ、落ち着いてトレセン学園に向かおうか…

ああ：楽しみだなあ：ワクワクするなあ…

あ、テンション上がり過ぎて忘れてた、飯食っておかないと持たな  
いな！

さあ、いくぞ！

AM11:20

流石ファン感謝祭、人の出入りが尋常じゃないのもあって検問まで  
されてるとは…

いやまあ、普段は関係者以外立入禁止ですからね  
慎重になるのもわかりますけど、待たされる側としてはねえ…  
たまりに怪しい人達が連行されてるのが見えると、必要なんだなっ  
て思いますけど

というか、この時点で腕章と名札の確認されるとか、マスコミ嫌  
われてるなあ…

検問渋滞は案外サクサク通れたから止まっていたのは5分程度で  
すけど、もやっとなりますね

私もフリーとはいえ記者の端くれですから、この扱いをされる同業  
者が今までどれだけやらかしたのか頭が痛い…

とはいえ、私には絶大なる楽しみがある！

さあ、急いで準備を整えなければ！

あ、でもファンとウマ娘達の交流を邪魔しないように気を付けま  
しよ…

コレ以上マスコミが嫌われる理由になりたくは無いですしね

P M 0 0 : 0 5

特設ステージの全景を取れるポジション確保！

機材準備ヨシ！

カメラ・マイク調整ヨシ！

電源も入ってるのを確認して…

あれ、結構ステージから離れた場所選んだのに…他にも人が…

ん…んんん???

サングラスとマスクをしてるけど、なんか見た事あるような…

いやいや、今はステージに集中せねば

情報ではそろそろの筈…くるぞ…！

えっ？

えっ？

私は、一体何を見せられているのだ…（無意識で撮影開始ズミ）

蹄鉄モチーフと思われるマスクで顔を隠した小柄な女性（ウマ娘）がステージに飛び込んできた、全身ぴっちりなタイト姿で

小柄だけど結構あるんですね…

しかも首元から鼠径部辺りまでジツパーが付いてるとか…

いけません、これはいけませんよ

非常にけしからんですよこれはあ！（クローズアップ）

と、推定カブラヤオーさんがステージ中央でポーズを取ったらと思っただけ同じぴっちりタイトにマスク装着ズミの女性が…

ええと、ドラムセットを抱えて飛び込んできたのは…推定シャダイ

カグラさん

推定カブラヤオーさんと推定シャダイカグラさんの間に入ってきた

た…

あれは、ベースかな？ を構えてるのが推定ナルシスノワールさん

で…

ギターを抱えて滑るようにステージに上がってきたのが推定ブレ

イクランアウトさん…

あつ、びたーんって転んだ…ええ、大丈夫かな…

あ、すぐ立ち上がって落としたギターを構えたのが推定ノースフラ

イトさん

カブラヤオーさんがプルプルしてるのは、多分笑いをこらえてるん

だな…

あつ、シャダイカグラさんがドラムでリズムを取り出して、他の皆

さんも合わせ始めた…

えっ？

えっ？

狂ったようにキレッキレのダンスを踊るセンターのカブラヤオーさん

そのダンスを先導するかなのような非常にハイペースかつアップテ

ンポな演奏を始めましたね！

他の皆さんもカブラヤオーさんに被らないように巧く踊りながら演奏してますね：

クツソレベルタケエ：

ええ：現役引退して結構過ぎてるのにこのキレツキレのダンスとか意味が解らないです（恍惚）

他の皆さんもオーバーアクションで全身を使いながら演奏してるので見応えもあるし、演奏そのものもこれ、プロと比べてもいいところいくんじやないですか!?

ハイスペック過ぎてこれからもファンで居続けます！（宣言）

P M 0 0 : 1 3

はあ：録画もバツチリ出来たし、イイもの見れたなあ：

コピー取ったらオリジナルデータはスイス銀行の貸金庫に保管しなくちや（使命感）

ああ、でも演奏だけで歌が無かったのは少し残念ですかねえ：何故か勝負服のゴールドシップが乱入して、カブラヤオーさんの隣で踊り狂って去って行ったのは意味不明でしたが：

彼女のダンスもキレツキレでしたが、遜色ないどころか上回る勢いだったカブラヤオーさんはやっぱ流石なんやなって：

あ、こつちに来てた人もテンションあがったんすねえ、サングラスもマスクも：

ユタカ選手じやああああああああああああああああん!?

あのっ、ちよっ、マスクとサングラスして！

速く！気づかれちゃうから！

はあ：

え？ 何でここで撮影してたのかつて：

一応、UR A 幹部から許可を得て撮影して m

はい？

撮影データのコピー、ですか？

ええと：一応お伺い立ててみますけど、駄目なら諦めてくださいよ

？

あ、もしもし

はい、あの娘に聞いてたライブの件ですね

出演者の関係者から、データのコピーをお願いされたんですけど

はい、はい

あの、お名前出しても？

OK？

あ、ユタカ選手です

え？

あ、はい、OKなんです、わかりました

えー、直接の依頼者からOKが出たので後日お送りします  
で、ですね

代わりと言ってはなんですけど…サインをお願いしてもいいですかね？

依頼者達の分を3枚お願いしたいんですが…

あ、良いんですか？

ありがとうございます

あて名はそれぞれこの名前でお願いします（名刺の裏にメモして手渡し）

それじゃ、私は撤収作業もありますんで

はい、では失礼します

ふう…

幸福の余韻も吹っ飛ぶトラブルの種に胃が痛い…

どう考えても私が悪役にされちゃう未来しか見えないのが…

だが、乗り越えた！

もう、さっさと帰ってデータコピーと保存をしなきゃな！

だから肩に置いてる手を放してもらっていいですかねゴールド

シップさん…（震え声

え？

さっきのダンスのデータを寄越せ？  
流星にそれは…あ、コピーで良い？

個人で楽しむだけにして下さいよ？絶対ですよ？フリじゃない  
ですからね？

じゃあ、トレセン学園宛てで送りますから

はい、はい。(名刺取り上げられ)

もう勘弁してもらえませんかね(震え声)

アツ、ハイ

シツレイシマス

PM10:00

長い一日だった…

約束のデータも発送したし…もう、寝よう…

しかし…眼福だったなあ…カブラヤオーさん以外はみんなバルン  
バルンしてたし…

さあ、明日もアポを取るところからお仕事かあ…

あー、お嬢さんがた、落ち着いたかね？

(まさかのギャン泣き迷子に遭遇とか想定外過ぎる)

何？ 中央トレセンの見学？(オープンキャンパスじゃなかった筈だが)

ああ、よそ見をして逸れたわけね…

誰か知り合いとか居る？

連絡取ってあげるよ…ここまで来たら最後まで付き合うさ

え？ 在学生に知り合いいるの？

ネーちゃんがいる？お姉さんがいるの？

違う？ネーちゃん???(何言ってるのかわからんが…知り合いがいるらしいから連絡取るか)

あ、モシモシ

はい、先日はお世話になりました

ああ、いえいえ、今回は少しばかり毛色が違う電話なんですよ

あ、お嬢さんがたお名前は？

セントミサイルにメテオシャワーね…

あ、すいません

セントミサイルにメテオシャワーの二名が迷子になっていましたね？

なんでも、そちらの見学にお邪魔する筈だった、と聞きました

はい、そうです

少々お待ちを

二人はどこから来たんだい？

小倉…(えつ、この二人を商店街外れの喫茶店まで連れてくだけで

も大変だったんだぞ…どうやって引率してきたんだ…)

お待たせしました

小倉から来たそうです

はい、あとお姉さんではないネーちゃん？がそちらに在籍してるらしいです

あ、私がそちらまで連れていきたいのはヤマヤマなんです…

無理です、この子たちのバイタリティについていけません

間違いないどこかで振り切られます

はい、はい

すいませんが生徒さんの照会をしていただいて、確認が取れたら迎えに来ていただいて良いですか？

それまでは喫茶店で何か食べさせておきますから(この子たち連れて商店街抜けるとか無理です)

はい、わかりました

では、すいませんがお願いします

はい、と云う訳でお迎えをお願いします

暫くかかると思うんで、何か好きなものを頼みなさい

奢りますよ…

え？

知らない人に食べ物もらったらだめ？

それだと付いてきたのも…ああいや、そうだね

じゃあ、こうしよう(名刺取り出し)

私は記者なんだ、フリーだけどね

だから、今から君たちにインタビューをするから、そのギャラとして何か頼む、というのはどうかね？

うん、そうか

あ、すいません

メロンクリームソーダとにんじんジュース、ウマ盛りキャロットパフェ二つとコーヒーを一杯、ブレンドで

さて、それじゃあインタビューといこうか(メモ帳とレコーダー取



り出し)

じゃあ、まずは改めて名前を

「みちやはセントミシヤ…ミチヤ…セントミチャイル!」

「めてはメテオシャワー!」

はい、大変元気で結構

小倉から来たそうだけど、誰か保護者と一緒に来たのかな?

「お小遣いとお年玉で来た!」

いや、そうじゃなくて…

「ロードエスパーおねーちゃん」

「一緒に来たのに迷子になっちゃったんだよ!」

そうか、それは大変だったね(迷子は君たちだ)

それで、何故見学に行こうと思ったのかな?

「ネーちゃんがカツコよく走ってたから会いたくなった!」

お、おう

実にシンプルな理由だね

というか、そのネーちゃんはレースに出てるんだね

「きつかしよーでカツコよく走ってた!」

「一番じゃなかったけどかっこよかった!」

ほほう、きつかしよーで…

えっ?

菊花賞で、ネーちゃん、小倉…まさか…

あつ、今窓の外を駆け抜けてブレーキしながら砂煙上げて戻ってきたのって…

「すみません！連絡を受けて迎えに来ました！」

あつ、やっぱりn

「ネーちゃん!!」

ナイスネイチャさん、ですよねえ（震え声）  
アツ、すごい

あのお子様二人がロケットみたいに抱き着いたのを受け止めてこられた…

しかも少しプルプルしてるけど笑顔で…

あ、くしゃつて表情が崩れたと思ったら二人を抱きしめて泣いてる…これは、見ない方がいいかな

「あんたたち…心配したでしょうが…」

「ごめんなさい…」「ネーちゃん、ごめんね…」

「アタシはいいから、後でロード姉さんに謝っておきなさいよ？  
すつごく心配してたんだから…」

「怪我は無い？ 痛いところは？ 変な人についていかなかった？」

「大丈夫ー」「僕らは怪我なんてしないよー」

「それならいいけど…あの、この子たちを保護してくださいった記者さん、ですよね？」

ええ？ あ、はい。 まあ、成り行きで

「この子たちと無事に会えたのはあなたのおかげです、本当にありが

「とうございました」

「いえいえ、良いんですよ」

「道端に座り込んでギャン泣きしてる子供を見過ごすのは大人としてどうかと思いますし」

「」

「しくっ！」「それはナイショ！」

「えっ？」

「あ、さっき注文した品物が来たみたいだね、取り敢えず座ってせつかくだからちゃんと食べてから行きなさい」

「「パフエ！」」

「あんた達！ちゃんとお礼と頂きますしなさい！」

「ま、まあまあ、小さい子なんですし」

「寝って、大事なんですよ（遠い眼）」

「アツ、ハイ」

「記者の人ありがとー！」「いっただっきまーす！」

「あ、ナイスネイチャさんも飲み物でもどうですか？」

「あー…じゃあ、ホットココアを…すみません、アタシまで…」

「ハハハ…気になるなら、そうですね…」

「ナイスネイチャさんとその子たちの馴れ初めでも取材させてください」

あの子達は食べるのに一生懸命みたいなんで（笑

「ホントにあの子達は…はあ、良いですよ、と言っても珍しい話じゃないですよ？」

良いんですよ、今年のクラシック戦線を盛り上げてくれている一人ですからね

寧ろこんな話が聞けるなんて、私は得してるのかもしれないね

「いや、納得してるならいいんですけど…やりにくいなあ」

「アタシの地元、実家の近所の子なんですよ」

「で、あの子達の御両親は忙しく飛び回ってて、余り家に居なかったんですよね」

「今は在宅中心の仕事してるそうですけど…」

「で、まあ、母がですね…知り合いだったんですよ、あの子達の御両親と」

「それで、一人も三人も変わらないからって、ウチで預かったりしたんです」

「それが一番最初ですねー」

ほほう、しかし、御実家はお店をやっていたのでは？

中々に忙しかったのでは、と思うのですが

「ええ、忙しかったのを見ていた私が、面倒を見る！って名乗りをあげちゃいましたねー」

「まー、最初は凄かったですよ？ 人見知りと癩癩で、蹴るは叩くは噛みつくは…」

ええ!? 噛みつくって、それ大丈夫だったんですか？

「大げさですなあ、子供が噛みつくくらいならそこまでじゃないで

すよ」

「それに、ニコニコ笑いながら世話を続けてたら、すっごい懐かれまして」

「当時は私が学校に行くのにもついて来ようとしてましたからねえ」

本気でベツタリじゃないですか…

(まだ中等部なのにカーチャン感が半端ないなあ)

「まあ、可愛いものでしたよ？ 出かけるたびにアタシの服の裾掴んで」

「商店街ですっころんでアタシのスカートズリおろしたのは許してませんが (真顔)」

「でもま、カワイイ妹分なんですよ、あの子達」

成程、家族なんですな…

「そうですね、まだまだ手が掛かるヤンチャなんで…今回みたいなのは勘弁してほしいですけどね」

「ええ、ホント…幼稚園の柵超えてアタシの学校まで来るとか、そういうのは… (遠い眼)」

行動力抜群ですね (震え声)

と、外に車…?

「ああ、すみません。この子達を自由に歩き回らせないために迎えをお願いしてたんですよ」

成程、それではここまで、と言う事で

貴重なお話、ありがとうございます

「はい、この子達の事、本当にありがとうございます」

あ、お迎えご苦労様です…!?（まさかのニアミスですか）

おお、彼の車を見た子供たちが目を輝かせながらカワイイって叫んでますねえ

確かに最近見ないモデルですし、可愛いと言えばカワイイ車ではあるのかなあ…

運転手がガタイのいい強面で、助手席に中学生、後部座席に子供たち…事案かな？

トレセン学園までの帰路でナイスネイチャさんの男性観が破壊されないことを祈りますか

勝ち切れない、善戦はする、また三着

それでも君は走り続けた、ひたむきに

名わき役では終われない、終わらない

ナイスネイチャ

高松宮記念、制覇

その時、君は確かに輝いていた

どうも、今回は取材に応じて頂いてホッとしていますよ

「そっスカ、まあ暇だったんで良いっすよ」

「んで、何聞きたいンすか？」

現役時代の貴女がマスコミに面白おかしく書きたてられたのは存じております

ですが、今回はレースの事だけではなく、当時のトレーナーについてもお聞きしたいと思ひまして

「…まあ、当時の記事に思う事があるのは事実っス」

「けど、ダンナと一緒に乗り越えた事っスから、今は気にしてない…気にしてられない、かな？」

と、言いますと？

「娘が地方っスけど、トレセンに入学したんで、一息ついたところなんス」

ほほう、娘さんが…

えっ？

中等部ですよね…？

「いや、高等部っスよ？ それが何か？」

あの…逆算すると卒業してすぐじゃないですかね…？

「いや、当たったのは7月後半のだと思うっすから…まあ、卒業後だからセーフで」

旦那様は当時のトレーナーさんでしたよね？（ギリギリ16歳…？）

あの、ぶしつけですが現役当時からお付き合いしてたとかそう言う事は…

「いや、感謝はしてたし信頼もしてたっすけど、好いた惚れたはまだ無かったっす」

ですよー！

当時は中等部で、高等部にかかる事無く引退、トレセン学園を去ったとはいえ、ねえ？

「卒業後に屈腱炎の治療とりハビリを続けてたんすけど、その時トレーナーが学園を休職してずっと付き添ってくれたんすよ」

「で、それで、その、ああ、アタシこの人が好きなんだって自覚してっすね」

おお、王道ですね

「押し倒しました」

フアツ!?

「いやあ、つい情熱を抑えきれなくてっすね（笑）」

それ笑い事じゃないやつですから！

駄目なやつですから!!



「そしたらあの子が出来ちやつてですねエ…やー、焦った焦った」

おお…もう…（顔を覆う）

「でもね、アタシが何か言う前に、ダンナがプロポーズしてきたんスよ」

「出来たって伝えたわけじゃ無かったんですけどね、感じるものがあつたのか、ダンナから言われたんス」

「お前に押し倒されたのは思う所がある、あるが最終的には受け入れたのは俺だ」

「だから、お前を俺にくれ。お前のトレーナーになったときは、競争バとしてのお前をくれって言ったけど、今度はお前の人生丸ごとくれ！」

「なんて、真顔で言うんスよ。そこで改めて惚れちやつたなあつて…」

情熱的ですねえ…（精一杯気を使った言い方）

「その後両親に報告して、許可貰って…いやあ、慌ただしかったっス」  
「デキてるのが解つてたから式はいいかなって思ってたんスけど、お互いの両親がもう、ノリノリで準備しちやつて…」

「せめてもの抵抗で身内とごく親しい友人だけって条件で式を挙げて…まあ、忙しくしてたっスね」

理解ある御両親だったんですね

「あ、ダンナのお義父さんお義母さんは孫が欲しくて仕方なかったんだそうっス」

「ウチの両親は、その…アタシと似たような馴れ初めだったらしく、覚悟してたそうっス」

ハハハ…それは、また

いやあ、随分脱線しちゃいましたがそろそろ現役時代のお話に戻りましょうか！ね！

「そっすね、じゃあデビュー辺りからで？」

それをお願いします

「アタシはデビューが遅めだったんですがね、これはダンナの方針だったんですよ」

「ジュニア期にみっちり基礎を仕上げて、クラシック戦線に殴り込む、アタシには其れが出来る地力がある、ってネ」

それは、かなり思い切った方針ですね

普通はデビューをしたらOP競争でレース勘を養わせたりというのが一般的ですが

「そういう意味でも、トウカイテイオーと似てたんじゃないっすかね」

ああ、そういえば彼女もデビューは12月でしたね

デビューからの戦績・レース内容で彼女の一強ではなく、貴女がライバルとなるのでは

フアンの間ではそう囁かれていたとか

「あー、まあ、当時はアタシも壁になるのはアイツだって思っていましたネ、それぐらい凶抜けた強さを感じましたシ」

「実際、ダービーでは格の違いを見せつけるような王道の走りで見先着されましたしネ」

三冠確実と言われ、皇帝の再来とも言われた当時のトウカイテイオーさんはノリにノってましたからね

蓋を開ければ三バ身差、帝王一強時代とまで言われたレースでした

からね…

それぐらい、ダービーのトウカイテイオーさんは強かった

「ソッスね、確かに強かったっス。それだけにリベンジを誓った菊花賞を回避、骨折…目の前が真っ暗になったっス」

「絶対にぶっ壊してやるって誓った壁が勝手に崩れて無くなったんですよ?」

「けど、ダンナが、トウカイテイオーは戻って来る。だから、アイツが取れなかった冠を取って待てばいい、ってネ」

おお…

「そこから菊花賞までトレーニングにも気合入れて…入れすぎちまったんすけどね」

「ダンナの先輩が装蹄師だからって、頼み込んで蹄鉄もキツチリ仕上げてもらったんですけど、気負い過ぎてたんですよ」

「結果は、青葉賞で負かしたツインターボとストロングガイザーに敗れて三着、一番人気に押されてたつてのに」

セントライト記念ですネ

「そっス。レースが終わった後で、ダンナが部分麻痺が残ってる左手で、シツカリとアタシの手を握って言われたのがキツかったっスね」

何と言われたのですか？

「今日のお前は独りで走ってた、けど、レースを走るのはお前一人かもしれないけど、レースはお前一人が走ってるわけじゃないんだ。ライバルがいて、それを支えてる人がいて、それを見守って、応援するファンがいる」

「焦り過ぎだよ、お前の持ち味である瞬発力からくる差し脚だって活

かせてなかった」

「次、菊花賞でも走るのはお前一人だけど、お前を支える俺がいる。お前と競り合うライバルがいる。お前を応援するファンがいる」

「今、ここで解れなんて言わない。最悪、菊花賞本番の最中でだって良い」

「けどな、お前なら：俺の相棒で、俺に競争バとしての自分を預けてくれたお前なら、菊花賞を取れるって信じてる」

「そう言い切って、手を離れたンですけど、握られた手が凄く熱くて：」

「なんだか、ダンナの顔を見れなくて、下を向きながらちやんと考えるツて伝えてからその日は帰ったんス」

当時の旦那様は、その、凄いですね？

熱血というか、情熱的というか：（誰かさんに似てる気が：気のせいかな？）

「ツスね、一晩たって、冷静になれたから良かったつスけど、寝落ちするまで頭の中で言われたことがグルグルしてたつスから」

「けどまあ、肚が座ったっていうか：菊花賞を取る、誰が居ても、絶対に。ダンナとアタシが取るって決めたんス」

成程

そして迎えた菊花賞で、見事手にしたクラシックの冠でしたが：最後まで誰が抜け出すかわからないレースでしたね

「そつスね、スタートからゆっくりと展開していったレースだったンで、チツとかかり気味だったんス」

「早めにながちまっても良い位置につけたのは、運も絡んだ事つスね」

「レースの最中もここでもいいのか、このままでいいのか、なんて考えがチラつきながら走ってたンですけど、ゴール版の前でアタシを真つ直

ぐ見てるダンナが見えて、思ったんス」

「アタシの最大の武器は瞬発力、なら最後の直線でぶつちぎればいい、ってネ」

坂を駆け降りる勢いのままに突っ込んで行った、見事な差し脚でしたね

「アタシとダンナの、自慢の脚ですからネ」

ええ、それだけに帝王不在だから勝てた、まるで空き巣なんて言う人が居たのは同じ記者として…本当に…

「ああ、それ気にして無いっス」

えっ？

「あの時、最後に競り合ったアタシらはみんな、トウカイテイオーが居ても負けなかった、そう自信を持って言えるくらい走れたと思ってます」

貴女方の誇りを見縊っていたようです…

謝罪を致します

申し訳ありませんでした

「良いんスよ。結果として菊花賞の後は色々アレでしたからネ」

屈腱炎での長期療養

一年のブランクを挟んでの復帰レース

時を同じくして骨折から復帰したトウカイテイオーとの直接対決となった有馬記念ですね

「っス。悔しいけど、アタシは仕上がり切ってなかった…いや、仕上がったのに、菊花賞ン時には及ばなかった、かな…」

「似たような条件のトウカイテイオーも同じく掲示板を外してましたけど、最後までアイツには先着出来なかったのも悔しい理由ですネ」  
「年明けのレースでも惨敗、おまけに屈腱炎の再発で引退を選ばざるを得なかった…」

トウインクルシリーズの常、とはいえ…

アスリートとしての側面から見れば、そう言う事もあると言えるでしょうが

未成年の、ましてや中学生・高校生の抱えるモノとしては重すぎるのではないかと考える人は多いでしょう

「故障引退したアタシが言うのも何ですけど、それでもアタシ達は走りたい、競いたい、一番になりたいんだ」

「それに、支えてくれる人がいれば、怪我をしても、走れなくなっても、アタシ達は立ち上げられる」

…強いですね

「いや、弱いつスよ？ だから支えあう人が欲しいんス」

そうですか…

それでは、この辺でインタビューは終了とさせていただきます  
レオダーバンさん、ありがとうございました

「やー、終わってみるとなんかこっぴड़ाかしいっスね…」

「ちよつとダンナに甘えてくるっス」

えっ？

あ…結構な勢いで走っていききましたね…

完治、したんですね…

元競争バにして現専業主婦、お嬢さんもウマ娘で、地方とはいえ競争バとしての道を進み始める、か…

レオダーバン

9戦4勝、菊花賞バ

あのトウカイテイオーと同期であり、デビュー当初はライバル関係になるかと噂されていたものの、ダービーでの3バ身差での敗戦

帝王不在の菊花賞で低く見られる事も

屈腱炎に有馬を阻まれ、屈腱炎で引退が決まった悲運の名バ

誰かが言った、帝王の好敵手になるのでは

誰かが言った、帝王に敵無し、好敵手現れず

それでも彼女は、彼女たちは前を睨んで走る

誰もが言った、帝王不在の菊花賞などと

誰にも言わせない

帝王が居なかったから勝ってた等と

最後の600

僅かに34秒の死闘

菊花賞

制したのは不在の帝王ではない

駆け抜けた獅子の心

その名は

レオダーバン

ええと…

スーツ、お似合いですね…？

「…どうも」

(は、迫力あるなあ)

今回はインタビューを承諾していただいてありがとうございます  
た

現役時代はダート3強として名を馳せた貴女のお話、しっかりと聞  
かせていただきます

「クラシック後半からは散々な言われようだったがね…」

ハハハ…(何をいえばいいのだ…)

ええと、ヒヤシンスSでは二番人気ながら、2着に9バ身差をつけ  
ての圧勝

続く伏龍Sと兵庫チャンピオンシップも快勝してましたね

「私は、強い踏み込みと、それを比較的長い時間維持できるだけの身体  
能力があった」

「それが意味するのは、鋭い差し脚で長めのスパートを掛けられると  
いう事」

「私とトレーナーはその武器で戦うと決めていた」

なるほど…しかし、その強い踏み込みは諸刃の剣とも言えるのでは  
？

ただでさえ、ウマ娘は最高時速70Km近くで走り抜ける存在です  
相当な負担がかかっていたのでは？



「そうだな、それは私もトレーナーも解っていた」

「だが、幸いと言っていいのは、ダートは芝に比べて負担が少ない事」

「そして、ダートレースは芝のレースよりも、短い距離が殆どという事が挙げられる」

「それ故、私達は全力で駆け抜けることを選んだのだ」

勝つために、ですか？

「違うな」

えう？

「私達はダートという戦場で、最強を掴むつもりで走っていた」

「つまり、最強という結果を得るために積み上げるべき、必然として位置づけていた」

それは、凄い自信だったんですね

「自信ではないさ」

「私はトレーナーを、トレーナーは私を」

「お互いを信じていただけだ」

(やだ、なんかスツゴイイケメンに見えてきた)

「だから私は、前に蓋をされ、周囲を囲まれた最終直線からでも差しきれたのだ」

兵庫チャンピオンシップの、ですか？

「そうだ、続くユニコーンSでは無様な走りをしてしまったがな」

いや、無様つて…

あれだけマークされてたら仕方ないのでは…？

「それでも、それを理由に負けたことを正当化したくはない」

「だからこそ、私達は進み続けたのだ。負けても下を向かずにな」

まさかの中11日で名古屋優駿への出走と勝利

そしてジャパントダービーの激走とハナ差勝利

続くダービーグランプリでの敗戦…

「3強としての面目躍如もそこまでだったかな…」

そんな事は！

帝王賞、マイルチャンピオンシップでも3着と立派な結果を出した  
じゃないですか！

「最強を掴まんと挑んでいた私達には、慰めにもならない結果さ」

「経験を積んだ格上のシニア相手、というのは理由にもならない」

それは…確かにそうですが…

「結果論でしか無いがね、私は伸び悩んで、燻ってしまった」

「最後は自身の全力の踏み込みに脚のほうが悲鳴を上げてしまった」

園田金杯、レース中の骨折でしたね

「左足開放骨折…へし折れた骨が、皮膚を突き破り、しかも全力で踏み  
込んだ脚が折れたものだから勢いよく転倒してしまってたね…」

レース場に悲鳴が響いた瞬間でしたからね…

「命に別状は無かった、とはいえ…私は二度とレースで走れない身体になった」

「病院で目覚めた私は、左脚の感覚が無かった事である種のパニックになってね、冷静になっていれば麻酔が効いていたと解つただろうに…」

「私は、ただただ静かに涙を流していたよ」

「悲しかったんじゃない、悔しかったんじゃない」

「況してや、走れない事で涙した訳でもない」

「愛する男の望みの為に、走れなくなった」

「ただただ、それだけが辛かった。流れる涙を止めることが出来ぬほどに」

えっ、あの、当時のトレーナーさんの事ですよね？

「ん？私が過去現在未来において唯一愛する男は彼以外居ないぞ？」

と、唐突ですね

「いや、私が一目惚れしてな。口説いて口説いて口説き落としてトレーナーになってもらったんだ…知らなかったか？」

いや、それ多分誰も知らないと思いますよ!?

少なくとも噂話にもなってますから、極少数が密かに見守っていたかも、くらいで…

「別段隠して居たわけではないのだが…不思議だな？」

（あつ、これイケメン？イケメンで見守られてた可能性が…女子校だし…）

「まあ良い、話を戻そう」

「その時の私は、自分が涙を流しているのも気づかなくてね」

「トレーナーにハンカチをあてられて、涙を流していたのと、トレーナーがついていてくれたことに気づいたんだ」

まあ、担当が大怪我して緊急搬送されれば、そりゃあついていますよ

「うん、そうだな…そんな事も思い当たらない程度には混乱していたんだよ」

「あの時トレーナーは、何も言わずにただ寄り添ってくれていたんだが」

「全力で抱きついてしまつてねえ…一切加減ナシで…」

あの、それ大丈夫だったんですかね？

「やー…肋骨がぽつきりとね…」

Oh…

「まあ、怪我の原因は転んだで押し通したらしいが…」

「その後、同じ病室で入院と相成つてね、トレーナーの方が先に退院したけども、色々と話し合ったものさ」

ああ、引退を決めた話し合い等もしたわけですね？

「うむ、引退を決めて、卒業したら入籍するということで話をつけたかな」

はい…？

「お互いの両親に挨拶をして、許しを得たら式を挙げよう、と決めてだ

な」

は、はあ

「トレーナーの実家が牧場をやっているね、力仕事も多いから、歓迎されたものさ」

「トレーナーも一線を退いて教官をやる、と決めたのもこの時だね」

そ、そうですか

「今はお義父さんお義母さんが頑張れるから、と」

「その……後継ぎになる孫を、と、だね……」

あー…そういうのは割と切実らしいですからね

それは、近日中に良い報告が出来ると思いますね？

「う、うむ。 まあ、その、ガンバツテマスカラ……」

ははは…可愛らしい一面もあるんですね

しかし、引退後も良い生き方が出来ているようで何よりです

「それは、旦那様が支えてくれたからさ……」

「そうだな、これが記事になるとして、後輩たちが見るかもしれないから一つ言っておこうか」

「まだ見ぬ後輩たちへ、君たちも支え合うヒトを見つけなさい」

「異性でも同性でも、年上でも歳下でもいい」

「私の場合は偶々こんな関係になったが」

(口説き落としたウマ娘が何か言ってる)

「お互いが支え合うなら、その形に拘る事は無い」

「君達に良き出会いが在ることを祈ろう」

はい、ありがとうございます

それでは、是非とも元気な後継者を見せてあげてくださいね

「え、鋭意努力している（真っ赤）」

それでは、お疲れさまでしたビッグウルフさん

黒鹿毛をなびかせ、雨も泥もなんのその

ダート3強の一角としてクラシック級ダート戦線を盛り上げた立役者の一人、ビッグウルフさん

現在は当時のトレーナーと入籍、トレーナーの御実家が営む牧場でお手伝いをしながら仕事をおぼえているそうです

ダート戦線、南関東二冠バ・ナイキアデイルイトさん、後に凡走と快勝を繰り返し、シニアから引退が見え始めた時期にまさかの海外進出、ドバイの地にてゴールドフィンマイルを制覇して世代の強さを再び証明してみせたユートピアさん

この三人はやはり、本当に強かったのだ、と

前は塞がれた

横も囲まれた

絶望に包まれた位置

抜け出す道など無いかに見えた

狼の牙が喰らいつくように

その鋭い差し脚はすべてを切り裂いた

ビッグウルフ

兵庫チャンピオンシップ

狼の闘志は、檻では抑えられない

いやあ、流石にこんな場所でお話を伺うことになるとは思ってませんでしたよ…

ここ、産婦人科の待機室じゃないですか…

「いや、妻が産気づいたもので…」

「ドタキャンも悪いかな、と」

レオダーバンさん、第二子ですか…

「無事に生まれてきてくれれば、それで良いんですがね」

「二度目とはいえ、落ち着かなくて」

「なので、思い出話をしますんで、それを聞いててください」

「多少は落ち着けると思いますが」

はあ、それはまあ、構いませんが

しかし、思い出話ですか

「ええ、先輩と同級生のアホとの思い出話…というか、バカ話ですかね」

と、言いますと？

「いや、学生時代は誰しも失敗つてあるじゃないですか」

若気の至りつてやつですね、わかります

「ええ、それで先輩のクルマがヒデー事になった話があつたなあ、と思ひ出しまして」



酷いというと、事故とかですか？

「ある意味事故というか…」

「まあ、順を追って説明しますよ」

はい、ではお願いします

「当時は成人したばかりだったんですけどね、私と先輩は結構つるんでたんですよ」

「と言っても、先輩がクルマ出してくれるから、一緒にドライブって感じだったんですけどね」

「あの日は、先輩と私と、同級生のアホでドライブに行ってたんですよ」

アホ、ですか？

「アホです（真顔）」

「普段は全力でバカなことやって、でも憎めないヤツなんで…ただ、酒が強かったんですけど、一定以上呑んだら悪酔いするんですよ」

「まあ、その悪酔いの結果が今回の話です」

なるほど、まあ、いますよね…

「ええ…じゃ、話戻しますけど、まあ、飯行くかって話になって」

「隣の県に旨い店見つけたってアホが言いはじめましてね」

「まあ、それならそこ行ってみるかかって感じで、先輩がクルマ出してくれたんですよ」

「確かにいい店だったし、飯もスゲー美味かったんですが…」

「アホが店の常連客らしき人と意気投合しましてね、飲み比べ始めたんですよ」

「私も先輩も止めたんですけどね…まあ、それで止まらないからアホなんですが」

「で、結果だけ言えば飲み比べには勝利したんですが泥酔しましてねえ」

ええ…厄介事の匂いしかしないじゃないですか

「ええ、まあ、そうですね」

「泥酔してた割に大人しくしてたんですよ、最初は」

「で、帰り道も半分くらいを過ぎて、今回はセーフかなあ、とか思い始めた矢先」

「トイレとか騒ぎ出すわけですよ」

「民家も店もない場所そんな事言われても、となつたんですが」

「先輩は、仕方ないからそのへんで済ませてこいってクルマ止めたんですよ」

あー…

「そしたら気持ちわりーとか、もう俺はここで死ぬからお前ら帰れ！とか良いはじめまして」

た、たちが悪いですね

「ええ、ホントに…道路の真ん中で、夜中とは言え大の字で寝転がってますね…」

「先輩と一緒に抱えてクルマに載せようとしたら、偶々通りがかつた人が、心配してこっちに來たわけですよ」

「当然、クルマに乗ってた訳ですが、それが軽トラックだったんですがね」

「アホが突然跳ね起きて、軽トラックの人に掴みかかりに行つたんで

すよ」

ええ……

「当然、私と先輩は一瞬の間を挟んで取り押さえに行きました、嫌なことに慣れてましたから」

「で、軽トラックの人の胸ぐら掴んでた手を、二人がかりでどうにか引き剥がしたら、まあ、逃げますよね」

「善意から声をかけたら胸ぐら掴まれたら、そりゃ逃げますよ、普通に私だって逃げると思いますし」

「そしたら、アホが、走り出した軽トラックに並走してドアを殴りまくってるんですよ」

ちょっと待ってください

「はい？」

並走？

「はい、パニックになったのか、ローギアで走り出してギア上げてなかったですけどね」

それでも30Kmくらいは出ますよね？

「軽トラックは普通に40Kmくらいまでは出ますね」

並走？

「ええ、100メートルくらいですかね」

「そのくらいドア殴りながら並走してたアホの姿が急に消えましてね」

「呆氣に取つられてた私と先輩も、慌ててクルマ動かして見に行つたんですよ」

あの、すいません

その人、人間ですか？

ウマ娘じゃなくて？

「人のドラ息子だとは思いますが」

ええ…なにそれ怖い

「話、戻しますね」

「で、消えたと思つたら、アホはまた道路に寝転がつてたんですよ、転んだとかじゃなくて」

「で、大丈夫か？つて聞いたら」

「手がいてえとか言うわけですよ…因みに拳には剥がれたドアの塗料がついてました」

…怪我は、無かつたんですね

「何故か、無傷でしたね…ああ、いや、少し赤くはなつてましたけど」

いや、おかしいですからね？

さつきから何一つ普通じゃないですからね？

「ですよねえ…」

「で、まあ、大人しくなつたんなら丁度いいかとクルマに積み込もうとしましたですよ」

「そしたら何事か叫んで海岸側に飛び降りたんですよ」

「あ、道路から海岸までは高さ5メートルくらいあつたんですよ」

「で、下は砂浜でヤブみたいな感じになつてたんですが」

いやまつて、おかしい  
なんで飛んだんですか

「アホだからです」

Oh…

「で、それなりの飛距離が出て着地したと思ったら、そのまま海側に駆け出してですね」

高さ5メートルなんですよね？

「最低でもそれくらいはありましたね」

着地？

「所謂ヒーロー着地を決めました」

繰り返しますけど人間ですか？

ウマ息子とか言いません？

「残念ながら人間ですね」

そうですか…

「それから海まで走っていったと思ったら、つめてー！とか叫びながら戻ってきました」

「仕方ないから、迂回して降りれる場所からアホ確保しにいくかって先輩と相談したら」

「アホがおーいとか言い始めてですね」

「何事かと思って先輩と一緒にアホを見てたら」  
「助走つけて、三步で駆け上がって来ました」

ええ…ええ…

「で、流石に力尽きたのか大人しくなったんで、クルマに放り込んで、シートベルトつけさせて」

「やっと帰れると思ったんですがねえ…」

「もう少しで市内まで帰れるってタイミングで気持ち悪いとか言い出して」

「リバースしました、盛大に」

「吐きながら窓開けて窓からも垂れ流すとかやらかしやがったんですけどね…吐ききったら、今度は超ローテンションで謝り始めたんで」

「大急ぎでアホの家に送り届けて、ご家族にパスして」

「知り合いの居るガソリンスタンドで、先輩と二人で大掃除ですよ」

うわあ…ご愁傷様です

「シート外してカバー外して、車内のはずせるものは片っ端から外して綺麗に洗って消臭剤ぶちまけましたけどね、臭い取れなくてシートは処分しましたよ」

「で、徹夜仕事になって私も先輩もハイになっちゃいましたね…コンパネ周りも全部いじろうぜ！ってなりました」

「そのままその日の夜まで掛けて盛大に弄り回しましたよ…ええ、廃車置場巡りしてシート探したり…」

わ、若さですかね…？

「まあ、今では笑い話にできてるんで、これはこれで思い出かなあと思わなくは無いですね」

そうですか…

しかし、それなりに話し込みましたね

「ですね、自販機で飲み物でも…」

あつ、看護師さんが…

「無事に生まれましたか!? 妻は!?!」

「そう、ですか…良かった…頑張ったな、レオ…」

あの、こちらはもう良いですから、早く顔を見せて上げてください

「良いんですか?」

はい、面白い話をありがとうございます

レオダーバンさんにも、お子さんにもよろしくお伝え下さい

「ありがとうございます! それじゃあ、今度は先輩とも話せたら話しましよー!」

あ、思わず走り出して怒られてら…

お子さんが元気に育つと良いですね…

うん、お幸せに

どうも、今回は誘導バのお仕事で忙しい中のインタビューとなりましたが、受けていただいてホッとしています

「いえいえ、近年は誘導バとして、レースを引退したウマ娘がターフに戻るケースも増えてますからね」

「結果として、仕事も増えた分増員もされましたから、問題はありませんよ」

そう言ってもらえると、気が楽になります

最近のパドックからの先導のみならず、バ場の巡回やアクシデント対処、ゲートでのトラブルでの対応要員としての側面も出てきましたね

「ええ、最近ではレース場でのイベントの際、観客の入場を出迎えるリーディング役や、パレードや楽隊等にも参加したり、その先導をしたり」

「本当に、やり甲斐のある仕事です。色んな衣装も着れますしね」

ああ、最近では着物を着て誘導したレースもありましたね  
今後は他にも仕事が増える可能性があるとか

「ええ、現在はまだ構想段階で、現実的にはどうなるのか、どうするかを話し合っているようですが、決まれば、また一つ大事な仕事が増えることになりますね」

なるほど

では、公表されるのを期待して待ちましょう



ところで、現役時代から変わらず身につけてらっしゃいますね、それ

「？ ああ、この編込みの飾りですか？」

ええ、編み込みの節一つ一つに菫色の花飾りが実に美しいですね  
それに、尻尾にも同じように花飾りをあしらったりボン

他のウマ娘の方は、尻尾に何かつけるというのは好まないようですから、珍しいなど

「あんまりジツと見ちゃ駄目ですよ？」（苦笑）

ハハハ…すいません、どうにも気になって

「もう…これ、貰い物なんですよ」

「深い意味も、考えもなく、すみれといえばこの色だよなって言ってみましたけどね」

ええ…紫のスマイルの花言葉を知らずに贈るとか…

しかも身につけるものでしょ…？

「貰った時はどんな顔すれば良いのかちよつと悩みましたよ」

「嬉しかったのは嬉しかったんで、笑顔でお礼を言えましたけど」

なるほど…

ところで送り主の事は聞いても？

「そこは秘密で（笑）」

秘密なら仕方ないですね（笑）

「まあ、貰った経緯はお話しますよ」

「なんでも、古い知り合いに頼まれて、鉄で造花を作れないか試行錯誤した結果らしいですよ」

「出来上がった試作品を相手に送ったら、相手が試作品に合わせたりボンとかを返送してきて、これに合わせるから3セットお願いと言われて作ったそうです」

「完成したら、送りつけた試作品はオマケで貰った、と言っていましたね」

随分とまあ、器用というか…無駄に無駄の無い洗練された無駄そのものと思える技術で仕上げてますね…

いや、無駄にはならなかったんでしようけど…

「で、偶々それを持って余してる所に居合わせまして」

「すみれ、好きだったよな…？ それ、やるよって軽く言われて「彩色まで済んで綺麗な仕上がりがりだったから、眺めてた所にそれでしたから嬉しかったんですけど、ね」

「まあ、深い意味も何もなく、思いついたから言ってみただけなのが解ったのが…」

「それはそれとして可愛いから喜んで貰ったんですがね」

それもまた、巡り合わせですかね

「そうですね、結果として良いものを貰えましたし」

そういうえば、現役時代の勝負服にもスマイレの意匠がありましたね

あの蒼いキャップにワンポイントで

「あら、よく見えましたね？」

そりゃあ、障害競走での活躍には心躍ったものですからねえ

平地競走ほど扱いは大きくないですけど、あれほど躍動する姿をみれば…

ただ、障害で怪我をする子が後を絶たない、というのが個人的には難しい問題かなと

「ええ、障害レースの宿命とも言えますけどね…」

「全力で走って、跳ねて、時速40〜60kmを超える速度で繰り返すんですからね」

「そりゃあ、ただでさえ足回りの故障が多いウマ娘の脚部に、さらなる負担がかかる競技ですもの、一瞬の判断の遅れで転倒することも少なくない…そんな厳しいレースです」

単純にやるが増えますからね

それだけに、平地競走と比べてどちらが格上という事も無い筈なんです…

「いやあ、見る分にはどうしても、ね」

「クラシック三冠やトリプルティアラ、シニア三冠の大レース程の盛り上がりは出せませんよ、障害レースでは」

しかし、貴女が制した障害レースでもある、中山大障害は見応えのあるレースでしたよ？

「…そうですか（苦笑）」

え、ええ

「私が、デビュー当初、というかシニアに上がっても勝てない日々だったのは御存知ですね？」

そりゃ、勿論

シニア一年目、5月の未勝利競争から実に9ヶ月ぶりとなる勝利  
東京特別障害を制してからの勢いは、驚嘆に値するものでしたよ

「ふふ…私は、本格化が非常に遅かったようで…」

「シニアの10月くらいから、ですかね。 やつと身体と感覚が揃っ  
て来た感じがあったんですよ」

「それまでは、これが普通なのだろう、と思っていたズレが」

「他の子は本格化を迎えて馴染んで消えるものだど知った時の衝撃は  
…」

それは、中々…

有名所としては、メイショウドトウさんも本格化が遅かったそうで  
すね

「らしいですね」

「シニア一年目で16戦、自分でも急ぎすぎたかな、と。 今なら、そ  
う思うペースで出走を繰り返してましたからね」

「その中で段々と馴染んでいく感覚が嬉しくて、楽しくて」

「勝てない悔しさも忘れて走り回ってた時期ですね」

それは…トレーナーさんも相当やきもきしていたのでは？

「ええ、引退を決めた時に散々愚痴られましたよ（笑）」

「そして迎えた二年目、三年目、私は後のG1である中山大障害を連覇  
しました」

ええ、春の二連覇、春秋連覇、合わせて三連覇ですからね

「その三連覇が良くなかったんですけどね…」

と、言いますと…

「当時は、斤量があつたんです…所謂、ハンデですね」

「しかも、このハンデが生まれた理由が、たった一人のウマ娘の連勝を止めるためだというのだから…」

ええ…？

あつ、もしかして！

「はい、当時の障害レース最強の呼び声も高かった、グランドマーチスさんです」

「ハンデのウエイトがどんどん重くなるのに、それでも勝ち続けたものだから、ハンデの重量増加ルールが変更されたほど、といえどそれだけの強さだったか想像できますか？」

確か…記録は4連覇で、健康状態の悪化と故障の発生で引退、と聞き及んでますが…

「その一因がハンデウエイトにある、と私は思いましたね」

「実際、近年改定されるまでは当時のルールのままでしたから、私もハンデウエイトを着けて走ってます」

「本当に、走りづらいんですよ…すっかり固定出来ないとずれるし、固定出来ても身体の動かし方に違和感も出る」

「競技人口そのものが平地競走とは比べるべくもない、というのもあつて、強すぎる存在には枷を着けたいというのは解らなくもないんですけどね」

実際に走る側としては、ということですか

「はい、それだけに改定されてよかつたと思います」

「まあ、グランドマーチスさんが強すぎたというのも在るんでしょうけど…色々やりすぎでしたし」

やりすぎ、ですか？

「ハンデウエイト、当時は上限ナシだったんですよ」

えっ？

「5連覇を賭けたレースでのウエイト、凄かったですよ…ホント…」

いつの時代も、居るんですね…そういう飛び抜けた存在って…

「ええ…まあ、話を戻しましょうか」

「シニアで中山大障害の連覇が途切れたものの、また勝ちたかった私は、調整をしていたんですが…骨折して休養、レース中に障害で怪我をして休養、最終的には、本格的な休養…というか、療養が必要な程、疲労が蓄積してしまつて引退」

それほど肉体を酷使する、厳しいレースなんですね

「そうですね、厳しいレースです」

「コースも、ライバルも、障害も、全てが自分に牙をむく相手です」

「何よりも、自分自身との戦いである、と私は考えていました」

「ですが、それでも私は障害レースが好きだった」

「もつと走って、勝って、喜んでほしかった…」

そうですね…

ん？ 喜んでほしく

「今のナシで」

え、いやでも今

「ナシで」

アツ、ハイ

(耳をしぼって軽く前掻きしてるからガチだ…)

「ええと、まあ、それで」

「引退して、療養に入って…ゆっくり過ごしてたんですよ」

「トレーナーさんも、偶に顔をだして、私が現役の時の愚痴を言っ  
帰ったり…」

「そうやって、数年ぶりにゆっくりと過ぐす日々で、お医者様からも  
う大丈夫、とお墨付きを貰って…」

「誘導バにスカウトされました、推薦までついてきたのは驚きまし  
けど」

いきなり話が飛びましたね

「元障害バだけに？」

ハハハ…(記者のやる気が下がった)

「冗談はさておき、ありがたいお話だったので、即座に返事を返しまし  
たね」

「レースで走れなくても、もう一度…ターフに戻れるなら、良いかなっ  
て」

「そして、今に至る…というところですかね」

そうですか…

今回は貴重なお話ありがとうございました

今後も誘導バのお仕事頑張ってください、ポレールさん

平地14戦1勝

障害35戦8勝

最優秀障害バ受賞

歴戦の障害バ、何気に春の天皇賞にも出走していたり、と波瀾万丈な経歴です

勝利を重ねるたび、枷は増えた

勝者となるたびに、錘を下げた

それでも北極星は、空に輝いた

ポレール

中山大障害、三連覇

北極星の輝きは、今もここにある



いやあ、お久しぶりですね

前回の情報は、本当にありがとうございます

「別に…けど、お礼は受け取っとく」

はっはっは…

今回はお礼を直接言いたかったのもありますが、少々お聞きしたい  
事がありました

「サインを送ってくれた分は話してあげる。何？」

いや、確証のない噂の裏付けをしてる最中なんですけどね…

あ、飲み物とお茶請けもどうぞ

「ん、ありがとう」

一時期、KさんとLさん、Bさんが噂の彼と家族同然に一緒に暮ら  
していたという話が

「ヴボフオゲハアツ」

うわっ！ すっごい勢いで噴き出してどうしました？

というか、大丈夫ですか？

気管に入ってますせん？

背中さすります？

あ、大丈夫？

じゃあ、落ち着くまでまちますけど…あ、どうぞおしほりです

「…ふう」

「で、何処まで掴んだの？」

いやだなあ、掴めてないから聞きに来たんですよお？

「アンタのそーいうとこ、キライ」

「とっかかりは偶然かもしれないけど、調べたんでしょ？」

「で、当事者からインタビュで聞き出しておきたい、だから今回のタ  
イミング」

おー、私のやり方をよく理解してますねえ

どうです、将来的にウチで記者やりませんか？

「それ、今関係ある？ …進路の一つとしては憶えといてあげる」

それは残念、未来を楽しみに待ちましょう

それと、今回のようなタイミングは中々ないでしょう？

基本的に貴方達は彼女に帯同している

例外的に、帰宅した時はどちらかが留守番に残るくらいで…

海外を飛び回っている彼女の仕事も理解しますがね、君たちのよう  
な未成年がプライベートの時間を持たないというのが、どれだけ珍し  
いかは理解しているでしょうに

「今の生活はアタシ達が求めて、かあs…あの人を受け入れてくれた  
事」

「それに、プライベートが無いって訳じゃないの、わかってるでしょ  
？」

あ、バレました？

いやあ、そろそろ腰を落ち着けて生活してもいいのでは、と思いましてね？

「御節介」

ですねえ、でもま、年の離れた友人を心配してのお小言だと思ってください

今日のところは、もう言いませんから

「仕方ないから許してあげる…トモダチ、だから」

はい、ありがとうございます

じゃ、話を戻しまして

「戻すんだ…」

ええ、これが本題なのは間違いないですし  
で、どうなんです？

「間違つては無い、けど」

「…仕方ないかな、説明するわ」

話がわかりますねえ、それじゃお願いします

「アタシ達は事情があつてかあs…あの人と一緒に暮らし始めた」

「まだ小学校にも上がってなかつた頃ね」

「その当時、一人の男を引き連れて帰ってきた」

「なんでも、入試の時に世話になった、って事らしいけど…まあ、体力無いから、その辺で世話になったんじゃない？」

「で、それなりに付き合いのある知人、友人くらいの付き合いだったら

しいけど」

「色々あつて大変だから、今日から彼の生活を管理します、とか言い出してさ」

色々あつてつて：いや、それでも小さな子を預かつてる人間が成人男性を引つ張り込むとか：

ええ…？

「なんか、ほつといたら何処までも転げ落ちる気がしたから、しっかりと管理して社会復帰させなければ、つて」

「お…兄さんは、無気力っていうか、生気が感じられなくてね」

「子供心に心配だったかな、アタシ達も」

そんなに酷い状態だったんですか？

「ほつといたら、そのまま消えちゃうんじゃないかってくらい」

「勉強と並行してアタシ達の面倒見てたあの人が、管理しなきゃって感じたのもわかるくらいには酷かったと思うよ」

それは…

何故、そんな状態に？

「さあ？ それは本人に聞くのがスジつてモノでしょ？」

「で、アタシ達もガツコ終わったら様子見たり」

「三人がかりで面倒見てたの、一月くらいかな？」

「お兄さんが自分から何かしようとし始めたのがそれくらいだったと思う」

…？

あの、もしかしてですが

食事や着替えも含めた、生活を手伝っていたような風に聞こえるの

ですが

「?」

いや、そんな何言ってるのって小首を傾げられても可愛いだけなんですけど…

「まーね、アタシ達は可愛いから仕方ないわよ」

くう、自覚持つてて強いな…

「お兄さんに散々言われたから自覚くらいするわよ」

Oh…自失状態でも男性観の破壊者は健在だったか

ともかく、話を戻しますが…

生活全般の補助をしていた、と?

「ええ、そうよ?」

「あの人は家の中でも最低限守るルールを少ないけど決めてた」

「そして、ウチで面倒を見るんだからルールは守らせる」

「だから、アタシ達で着替え手伝ったり、ご飯食べさせたり」

「その辺は、割とすぐに自分でやるようになったけど」

そりゃ、成人男性が年齢一桁の子に面倒みられてたら自尊心がゴリゴリ削れますから…

「その自尊心も出てこないくらい、酷かったのよ」

「でも、手伝いが必要だったのは別の理由」

「発作的に、何かを思い出して苦しんだの」

「顔を真っ青にして、汗だくになって、酷いときは吐いてた…」

トラウマ、ですかね？

何かの拍子にフラッシュバックして、という感じですか  
心療内科の受診を勧めるレベルですね

「勿論、あの人もアタシ達もそう言ったわよ？」

「けど、頑なに断られて…」

「結局、あの人が知り合いの専門医に相談しながらカウンセリングを  
続けてた感じかしらね」

「それで、症状が改善されたのが大体一月ってワケ」

頑固というか、何というか…

「そうよね、だけど仕方ないかなって」

「それに、お世話してる間も…」

間も？

「…いえ、これは内緒よ」

「大体、半年くらいかしらね、一緒に過ごしたのは」

「流石に家事とかアタシ達の相手をするだけで居候は気が引けたみた  
い」

それって、所謂ヒモ…

「専業主夫ね」

いや、どう考えてもひも

「専業主夫ね」

アツ、ハイ

「ま、それで準備を整えて、伝手で弟子入り決めてきたって言われて」  
「住み込みで修行してくるから、出ていくって言われて…アタシもア  
イツも駄々こねちゃった」

年齢一桁ならそういうものでしょう

心の動きを抑えるのは、年を重ねても難しいものですからね

「結局、月に一回は顔を見せるって事で話をついたけど…」

「きちんとアタシ達に目線を合わせて、真剣に謝られたら…折れるし  
かないじゃない？」

「そーいうトコ、ズルいと思うんだけど」

では、直してほしいですか？

悪い癖だから、と

「まさか、お兄さんらしいって今でも思うもの」

それって暗にズルい男だって言ってますん？

「ノーコメント（笑）」

良い笑顔ですねぇ…

解りました、今回はここまですべておきましようか

「あら、もういいの？」

ええ、彼女が戻ってきたら怒られてしまいそうですから

では、また

「ええ、そつちもドジ踏んで捕まらないようにねっ」

勿論、そんな真似はしませんとも

さて、今回は望外の情報が入りましたね

調査で得られた情報も裏付けがいくらか取れた形にもなって、実にいい

しかし…彼女らが彼と暮らしていた時期があったというのは…

意外というか…

ま、いいです

目撃情報の方も纏めておきますか

尾花栗毛の子ウマ娘なんて珍しいですからね

そして、そんな子供をかばって大立ち回り…というには手を出しては居なかったようですが

ま、そりや目立ちますよねえ

おかげで目撃情報も複数出てきて楽でしたが

商店街で買い物をして、彼と子ウマ娘が荷物を抱えて歩いていたところ、人にぶつかってしまった

運悪く、相手があまり質の良い相手ではなかった為、絡まれてしまった、と

威嚇してくる相手に対して、冷静に謝罪しながら子ウマ娘を庇うようにしていたのが目撃されていますね

そこからまあ、子ウマ娘に何事か言われて殴りかかった相手に対して

額を拳にぶつける様にして受け止めた、と…格闘家か何かですかね？

大きく振りかぶって殴りかかるテレフォンパンチに対処、とはいえ



普通は額で受け止めようとは考えませんし、打点をずらすために相手の腕が伸び切る前に踏み込んで受け止めるとか素人の発想じゃないんですがねえ…

しかも、巧い事硬い部分で受けて拳を痛めさせるとか彼、何者なんですかね？

その後すぐ、見ていた人間が通報したのか警官が到着、無事解決彼らは嚴重注意で終わったようですね

あの場ではヒモ、と言いましたが…

彼は彼なりに思う所があった、と言う事ですか

やれやれ：貰った顔写真が大学生時代の若い頃で、髪型も違うと来ては直ぐには解りませんよ

これは、判断に困りますねえ…

ま、クライアントからの依頼はキャンセルされてませんし継続しますかね

さて、次のアポは誰でしたかね…？

どうも、今回はありがとうございます

「いやいや、姐さんのインタビューもしたんでしょ？」

「だったら問題ないっしょ。姐さんの人を見る目は信用してますし」

ハハハ…

有難い評価ですね

「いや、アンタへの評価じゃなくて姐さんへの信頼だから」

直球で来ますねえ

ですがそれでこそ、ですね

「お？ アタシの事も調べてきてるってワケかい？」

そりやまあ、多少なりとも下調べはしますよ

「フーン…ま、いいか」

「んで、何が聞きたいんだい？」

話が早くて何よりですね

では、遠慮なく

現役時代の事と、装蹄師の彼とのエピソード等ありましたら…

「OKOK、そんなんでいいなら話ましょ」

(現役時代から変わらず、見た目と中身のギャップ凄いなあ)

「アタシはデビューは芝だったんですけどねー、それなりに走れちゃったもんで、ダート転向が遅くなったんですけどよね」

「元々、デビューそのものも遅かったのもあって、結構慌ただしい感じでしたからね」

OP競争への出走が続いた時期ですね

「クラシックでも目立った勝ち方が出来なくてねえ」

「後半にはダート転向もあって、まあまあ勝てるようになってきた感じだったけど」

「シニアに上がってから初重賞への挑戦、トレーナーとも相談しながらあーでもないこーでもないってやってたっけ」

実力をつけてきた、と評されてのマーチS

一番人気のレースでしたね

「そそ、結果は期待に応えられなかったけどねー」

「次走のプロキオンSは勝ってよかったけどさ」

「そこからはもう、結果は出なくてね…」

ああ…確かに勝ち星はないですからね

「まー、終わってみれば無事これ名バってね」

「…トレーナーの分析では、海外のダートや芝の方が向いていたかもしれない、ってさ」

「ダート6勝のうち4勝は、1秒以上の差をつけての勝利、しかも稍重から重のバ場」

「プロキオンSに至っては稍重でレコード…」

成程…根本的に日本のバ場とマッチしていなかった…と

「可能性の話だけどね？」

いえ、貴女の走りその物を考えると、それは十分にありえるのでは？

「確かめるチャンスも無かったし、今は仕事が愉しいから別にいいかなあ」

「最後までトレーナーに謝られたのは、辛かったけどね」

謝られた、ですか？

「そ、アタシに気持ちよく走れるレースを用意できなかった、って」  
「最後まで、こんなアタシにさ」

それが、トレーナーとしての矜持、誇り、使命感、義務感…  
どんな言葉でもいいですが、貴女のトレーナーが心から貴女を輝かせたかった証なのでしょう  
だからこそ、最後まで拘ったのでしょね

「ま、頑固爺だったし…良いトレーナーだったけどね」

良い笑顔ですね

「ありゃ、そうですか？ ま、なんだかんだ、今となっては良い思い出ですし」

卒業と同時にお姉さんのお手伝い

並行して色々な資格を取っていたそうですが？

「調理師免許、心理系、マッサージ系、簿記に会計、食育とついでにス

ポーツフードマイスターとアスリート栄養食インストラクター、重機に運転免許、フグ調理師免許まで取得できたねー」

いや、何処を目指したラインナップなんですかね…？

「いや、ウチの仕事手伝うなら色々出来た方がいいかなーって」

「最近はトレセン学園の生徒も来るようになったでしょ？」

「だからカウンセリングの手伝いや、マッサージのサービス、食事も栄養管理の面からサポートを考えて、練習場の整備に重機」

「ね？ 全部いるでしょ？」

いや、普通はそれ一人に集中させちやダメな奴なのは…？

「そりやそうでしょ、けど、居ないよりはいいからね」

「本格的に事業拡大する時に、その辺も雇用する予定だけど、来るとは限らないからねえ」

成程…？

「ま、世話になった人を御持て成ししたいって事」

「トレーナーの爺も、学園のみんなも、一緒に走った奴らも」

「ああ、でも、タイキシャツル辺りは忙しくて来れないかな？」

あ、一度レースで争いましたね、そういえば

「そそ、一回だけだったけど、まーレース終わったら片っ端からハグしてくるから印象深くてね」

ああ…確かに…

「反射的にリバー入れちゃったからさあ…」

ふあっ!?

あつ、だからウイニングライブで妙に汗かいてたんですね…脂汗を

…

「いやあ、良いのが入っちゃって…崩れ落ちそうになったから思わずハグするみたいな感じで抱えてはけたんだけどね」

「ナイスパンチデースって言いながら青い顔してたなあ」

知りたくなかった舞台裏だなあ…

「あ、でも」

「偶に軽めのスパarringはちよいちよいしてたよ?」

「アタシのは空手と拳法がごっちゃになったなんちゃってボクシングだったけど」

本気で知りたくなかったんですけど!?

「まーまー、ガチってるのはトレセン学園には今は居ない筈ですから」

座  
お願いしますからその手の情報は止めてもらっていいですか(土下

「おおぅ…そこまでするかあ…わかりましたよ、もう言いませんから…」

はい…ああ、なんかもう、終わっていいですかね?

ちよつと、こう、精神的に…

「あ、うん…なんかごめん」

いえ、お気になさらず…

では、今回はありがとうございます、テンパイさん

「じゃ、次は宿泊に来なさいな」

よ…予約が取れたら（震え声）

姉のナルシスノワール同様に美しい黒鹿毛をなびかせ、芝・ダート  
を走り抜けたテンパイさん

髪型・服装・礼儀作法に所作：口さえ開かなければ何処かの御令嬢  
のようにしか見えない彼女は、余りにもアグレッシブだった…

レースでは目立った結果を残せなかった彼女は、現在姉の補佐をし  
つつ手の足りない場所の手伝いをしながら更なる資格獲得に余念が  
ないとか…

尚、追加のタレコミがあつたので補足しておく

彼女がマツサージの資格を取った背景には、ある人物が関わって  
いた

そう、あの装蹄師である

彼女の担当であつた老トレーナーからの依頼もあつて、蹄鉄と  
シューズの模索を続けていた関係で、割と顔を合わせていた、との事  
そんな中で、本質的に世話好きで面倒見が良い彼女が、何の気なし  
に肩を揉んであげた事があつたそうです

その時、相当肩が凝つていたのか、大いに褒め、礼を言いながら可  
愛がつていたとか

それからは顔を出す度に肩を揉んでいたそうです

いやあ、かわいらしいとk

えっ？

あの、ちよっ

なんでばれ

ウマ娘のパワーで人が殴られたら無事じゃ済まん



「自分は交通機動隊所属、警視庁騎バ隊隊員、警部補の新志と申します」

はい、ご丁寧にありがとうございます  
私はこういうもので…（名刺差し出し

「ははあ、記者さんでありますか…」

ええ、フリー何で色々と自分でやる必要がありましたねえ  
今、少々お時間よろしいですか？

「ええ、まあ。本日は半休です。これから着替えて帰宅するところ  
であります」

「自分に何か御用が？」

はい、元競争バとしての貴女に、是非  
その喫茶店で良ければ昼食も御馳走しますよ？

「ハア…わかりました。自分で良ければお話させていただきます」

「報酬を頂く事は服務規程に反します」

「昼食を摂るにあたって、貴方にナンパされ、相席した際の雑談という  
事で良しとするのなら、受けましょう」

あ、ハイ

ではお待ちしておりますねー

「先輩に聞いていた通りの人物のようですね…では、後ほど」

（おや、私の話が流れている、と…まあ、隠してはいませんが不思議で

は無いですが…)

「おまたせしました、記者殿」

いえいえ、珈琲一杯を堪能している最中ですので問題ありませんよ

「そうですか、で、何が聞きたいのでしょうか？」

そうですね、手始めにお名前が変わっているようですが？

「ああ、それですか。我々騎バ隊は慣例として、着任時に警バ名を授かるのです」

「確か…皇居警護任務等を受けた際に、御褒めの御言葉を賜った者が居たのですが」

「己の経歴を示す名を、名乗るのが辛かったのか、名を告げることが出来なかったそうです」

「普通ならば、不敬であるとされるところですが、当時の陛下が、今の貴方に名を贈らせていただけませんか？」と」

「そうして名を賜り、それを誉れとして伝え、我等もそのような存在にならんとする決意と覚悟として、着任時に名を授かるようになった、と先輩から聞きました」

おお、それはまた…

随分と由緒あるものなんですね

「いえ、現在に至るまでに数々の変遷があったそうで、今では形式的なモノでしか無いそうです」

「ですが、我々隊員にとっては大きな儀式であり、護る側になるという踏ん切りでもあります」

「やはり、大事なものなんですよ…」

ははあ、歴史あり、と云うことですね  
という事は、プライベートでは以前の名前を？

「ええ、そうなります」

「警察手帳には警バ名で登録されておりますが、戸籍等は変わりませ  
んのので」

「退職の際に返納するのは装備や備品だけではなく、警バ名もな  
すよ…」

成程、在る種独特な世界なんですね

では、現在の主な御仕事などを聞いても？

「構いませんよ。主に近隣の学校施設での交通安全指導、通学路  
での警邏活動、楽隊やパレード等にも参加することが多いですね」

「後は、緊急展開が必要な場合は応援要請が来ることもありますね、車  
や二輪では難しい場所でも、我々ならば走っていけますので」

「そして、皇居の警護も我々が参加する仕事でありますな」

意外と言っては何ですが、多岐にわたる御仕事ですね？

「ええ、確かにそうですね」

「ですが、我々を見て、小さな子供がうまのおまわりさん、と言って手  
を振ってくれるのは嬉しいものです」

「楽隊やパレードの参加も、ウマ娘としても嬉しいものです」

ああ、ウイニングライブ的な？

「近しいモノがありますね」

成程…

「勿論、そういった露出が増えれば、取材などに応じるのも仕事としてありますが」

「普通は、事前に、許可をとって、スケジュールを調整し、その上で問題が無いと判断されて行われるものです」

アツ、ハイ

「今後は常識的な判断の基、行動をしていただけると信じて、この場を設けました」

「其処はしっかりと認識していただきたい」

フム…

可能な限り善処することを検討したいと思います

「そうですか、では期待しましょう」

「おや、真面目な貴女からすれば怒られるかとも思ったのですが、ああいや、怒らせる意図があったわけではないですがね？」

「いえ、出来ない・やらないことははぐらかすと聞いています」「曲がりなりにも返答を頂けたので良しとしました」

ぐっ、そうですか（誰ですかねえ…）

「それでは、次の質問に移っても？」

「構いませんよ」

「それでは、現役時代のお話をお願いします」

「現役時代、ですか」

「特筆するような事は無かったような気がしますが…」

御冗談を

クラシック期では準OP競争でのコースレコード勝利を始めとして

芝・ダート・障害競走で勝利した、となると珍しいにも程がありませんよ？

「ああ、確かにそれは珍しいかもしれませんがね」

「ですが、何れも重賞では有りませんし…」

いや、普通は芝からダート、ダートから芝、芝から障害、障害から芝なんて転戦繰り返しませんからね？

「そういうものですか」

ええ、勝利を収めて転戦というケースはかなりレアです

それに、重賞といえど日経賞

通算で三度の参戦、そして三度目での劇的な勝利は語り草ですよ

「支持率0.2%で勝利したのは私が初めてだそうですね」

障害重賞で活躍したアワパラゴンさん、重賞レースでは掲示板の常連だったローゼンカバリーさん

そして前に行くシグナスヒーローさんを躲して先頭を奪った切れ味鋭い末脚

後に海外でも結果を叩き出す事になるスト…いえ、キンイロリョテイさんをも抑えきった見事な勝利でした

「当時所属していたチームのトレーナーの悲願でしたからね、重賞での勝利は」

「私を含めて、中々勝てない…勿論OP競争等では結果を出していましたが」

「それでも、重賞に勝てないという事は、トレーナーが侮られるには十分な理由でした」

「先輩から続く、トレーナーに勝利を届けたいという思いは、チーム全員が持っていた願いと言ってもいいでしょう」

その先輩とは、もしや…

「今、ここでその話はゆるしません」

…わかりました

「私達のトレーナーは、良く言えば中堅、悪く言えば勝ちきれないトレーナーだと言われていました」

「勝ちきれないのは、私達ウマ娘だというのに…」

苦しい時期だったんですね…

「ええ、ですがチームの共通認識として、共通目標として、重賞勝利を掲げていましたからね」

「それに、先生からも助言を頂きましたので、焦り等は抱えずにすみませしたよ」

助言、ですか？

「ええ、私達は自分がやらねば、自分が、自分がと考えていました」

「ですが、先生は自分だけで抱え込まずに考えたらどうだ、と」

「折角チームなんだ、お互い協力出来るところはすりゃあいい」

「幸い、後輩も居てくれるんだろう？ なら、継いでいけばいい」

「そういう強みも在るんだ、忘れてちやもつたいないぞ、と」

それはまた、随分無茶苦茶な：

今まで取材した中で思ったのは、皆さん一着を目指して走ります  
その思いを抱えたまま、他の誰かに託す事を考えろとか：

「そうですよね、普通の子ならそう思ったと思います」

「でも、私達は先輩から既に託されていたんです」

「引退を余儀なくされ、泣いていた先輩に」

「だからこそ、私達はチームとして強くなりたい、なろうと思えたんだ  
と思いますよ」

そうですか：

良いお話をありがとうございました

「いえいえ、私も：自分も学生の頃を思い出して、懐かしかったです  
」ですから、この話はこれで良いのです」

はい…

それでは、私はこれで失礼します

新志警部補：いえ、テンジンシヨウグンさん、また何かの機会があ  
れば、宜しくおねがいます

「ええ、まあ、御仕事でお会いしなければ良いですね？」

ゼンシヨシマス

額の部分に星のような一房の白毛と、豊かな黒鹿毛を靡かせ走り抜  
けたテンジンシヨウグンさん

彼女はデビュー当時、未来のダービーバも夢ではない、素質がある、

そう言われ、期待されていました

しかし、チームに所属してレースを繰り返すも、思うようには勝てない日々

芝からダートへの転向、勝利を収めるも重賞への夢を諦めずに再び芝へ

条件戦では勝利を収めるも、やはり重賞では勝てない日々

そして障害レースへの転向

グレードレースこそ落とされたものの、確たる結果を掴む

だが、それでも、諦められない、諦めたくない、掴み取ると決めた勝利を目指し、再び芝へ

三度目の日経賞、G2競争であるそのレースで彼女は念願の勝利を掴んだ

だが、次走の天皇賞春以降は二桁順位が続き、その年のアルゼンチン共和国杯を最後に引退

その後は教師の勧めもあって、警視庁騎バ隊に入隊（通常の警官枠とは別で、試験も厳しい）

現在は叩き上げで警部補まで昇進、何れは騎バ隊の隊長になるので、と周囲は期待しているそうです

彼女は何度も挫折した

彼女は何度も諦めた

それでも、と立ち上がる事を

走るのを辞めることを

全部を諦めることを

諦めることを諦めた彼女は、何度も挑んだ

芝で

ダートで

障害で

それでも伸ばす手は阻まれた



それでも、諦めを踏み潰し、挫折を蹴り飛ばし  
応援する声も殆どない、そんな場所でも  
彼女は、ただ前を睨んで走り抜けた

バ群を切り裂いて飛び出したその姿は

日経賞 制覇 テンジンシヨウグン

誰が疑っても、自分だけは勝利を疑うな

今日はお忙しい中、ありがとうございます

「ええ、本当に忙しい中よくもまあ…」

「しっかり根回し済みだったから、良いですけどね」

はっはっは、警部補殿に釘を刺されましたからね

「あの子はもう…」

「ま、良いですよ…ただ、流石に此処では…」

あ、リハビリ室の隣の部屋を許可貰ってますんで

「本当に手回しが良いですね」

御褒めに与り恐悦至極

「皮肉ですよ」

皮肉ですとも

「本当に噂通りですね…ま、良いです。さっさと済ませましょ」

はいはい、では移動ですね

「それで、何から話せば？」

デビューの辺りからお願いします

「はあ…デビューはダート、二戦目まではそのまま走ってたわね」  
「チームにスカウトされて、トレーナーに言われて芝に転向」  
「其処からは条件戦でステップアップしながら進めてたわ」

途中で一度だけ掲示板を外してましたね

「チツ…良く調べてるね、そう、あの時はアタシの脚部不安が発覚してね」

「それでトレーナーと少し折り合いが付かなくって、まあ、あのザマ」

成程、脚部不安なら走らせるのは止めたくもなりますからねえ

下手に悪化すれば歩くこともままならなくなる

大人として、責任者としては葛藤があったのでしょうか

「今ならその理屈はわかる」

「でもね、子供だったアタシは走りたかった」

「走って、アンタの教え子は、アンタの担当は勝てるんだって見せたかったの」

「あの頃はそんな素直に言えなかったのもあって揉めに揉めたけどね」

だから中15日での出走を強行した、と

「強行、と言われればそうだけどね」

「あの時のアタシには引けない勝負だったの」

「其処から駆け足で条件戦を挟んでエプソム、毎日王冠」

G1バを制して、満を持しての天皇賞秋、でしたか

「そう、あの屈辱と羞恥と憤怒と後悔に塗れた天皇賞」

メジロマックイーンに6バ身差での決着

そして、斜行と判断されての降着

「アタシにも、自信はあった」

「自負も、矜持も」

「ダイタクヘリオスとバンブーメモリーに勝ってたどり着いたあの場所」

「どれほど強く踏み込んでも、どれほど必死に脚を前に出しても」

「一歩進むごとに、あの背中は離れていった…」

GI史上初の裁定でしたが、間違いなく、あのレースでの最強は彼女でしたね

「名目上はGIバとしてアタシは名前を刻んだ」

「けど、あの背中を何度も夢に見た」

「有馬への出走が決まるまで、何度も、何度も」

「そして、目を覚ますと決まって思い出したのが、能面のような顔をしたトレーナー」

あのウイニングライブは異様な空気でしたからね…

その後の記者会見で有馬直行を予定している、と発表

今度こそメジロマックイーンに勝つと宣言

何が正常なのか解らなくなるような状況でした

「そして迎えた有馬では、4着…結局メジロマックイーンに先着することすら出来なかった」

まあ、あの有馬は波乱も波乱でしたから…

参戦者も、ナイスネイチャさん、ダイタクヘリオスさん、メジロライアンさん

そして、ツインターボさんとダイユウサクさん

誰もが予想もしなかった激走と、誰もが想定した爆走でペースも崩れていましたし…

「ツインターボの大逃げは解ってた、だから備えられた」

「でもダイユウサクは普通に走って普通に勝った…ただ、強かった、速かった…」

「前走に比べれば着差も縮まってはいたようですが？」

「さつき貴方が言ったじゃない、崩れていたからそうなっただけよ」

「おまけに脚部不安が悪化、様子を見るも快方には向かわず、引退…」

「悔しかったわ、トレーナーに胸を張ってG1勝利を見せられなかったのが」

「チームのみんなの応援に結果で応えられなかったことが」

「もう、走って結果を掴めない事が…」

…通算戦績、15戦7勝

東京レース場では5戦して全勝

芝中距離では10戦して7勝して、二着は3回

掲示板を外したのはたった一度だけ

これ程の成績を示した貴女が、自慢の愛バで無いわけがない  
違いますか？

「…：トレーナーは最後に、お前は私の自慢で誇りだ、って」

「何時もの優しい微笑みを浮かべて、そう言ってくれた」

立派なトレーナーさんだったんですね

「アタシ達のチームを率いて、育ててくれた自慢のトレーナーよ」

「だから、後輩達に託してしまった…」

彼女たちも、それを受けてしつかりと前を見据えて走っていたじゃないですか

「それでも！…それでも、アタシは余計なことを、言わなくて良いことを伝えてしまったんじゃないかって、ずっと思ってた」

そんな貴女に、プレゼントです

警部補殿が音頭を取って、皆で用意したそうですよ

この、寄せ書きを

「…」

貴方は間違っていない

貴方の意志を、闘志を、願いを

受け継いだチームの皆さんは、トレーナーさんと共に誇りを持って走ってましたよ

「ありがとうございます、ございます」

いえ…

それでは、そろそろ御暇します

今回は、ありがとうございますでしたプレクラスニーさん

ゆつくりと、その寄せ書きを読んであげてください

「そうします…あの子達の、その後輩達の思いを…ゆつくりと、受け取ります」

小柄な体躯、透き通るような白い肌、そして太陽に輝く芦毛を翻し、

駆け抜けたプレクラスニーさん

現在は医療従事者として、日々の激務に奔走しているそうです  
戦績を並べれば、優駿と呼ぶに相応しい、素晴らしい戦績を刻み  
脚部不安から引退を余儀なくされた名バの一人

天皇賞秋と有馬記念は余りにも異様、尋常ならざる波乱

結果として、彼女はあまりに低く見られ、所属チームすらも侮られる結果となりました

それでも、彼女の後輩たちは奮戦を続け、闘走の中で消えてゆきま  
した

余りに当たり前に見すぎて、お忘れでは無いでしょうか

中央で走れるだけでも一握りなのだ

そこで勝利するだけでひとつまみなのだ

重賞を走るだけでも上澄みなのだ

G1出走だけでも世代の上澄みなのだ

決して、侮られて良い存在ではないのだと、思い出して頂きたい

さて、次のインタビューは…

「ハツハツハ、随分と元気に走り回ってるようじゃないか、ニンジャ」

あ の、私は記者であつてニンジャでも探偵でも無いんですけどねえ  
…

ついでに言えば、何故ガードがついてる出入り口が一つの部屋に呼んだんですかねえ

しかも、アポは無いから自力で来てくれたまえとか…

無茶振りが過ぎますよ？

「何を言ってるんだ、君は」

「この部屋は防音だから多少騒いでも問題ないが、事前にカメラの画像をループさせて通気孔から侵入してくる記者など居ないよ？」

「やはりニンジャじゃないか！」

自分がやれって言ったのに…

「普通はやれと言われても出来ないと思うのだがね？」

話が進まないのですさつさと本題に入ってくださいよ、Mrトニー  
貴方の依頼通り、彼に関連する記事は集めてるでしょうに

「いやあ、ロメオの奴が何人のシニョリーナを笑顔にしたのか気になつてなあ」

「もう、何年経ったか…出逢った時に、感じた通りだったよ」

ロメオ…？

いや、そう言われるだけの事はやってるみたいですけどね？



彼の名前はちが

「ロメオさ、それで良いんだ」

「彼と初めて出逢った時に、お互いに名乗らずあだ名をつけたんだ」

「だから、彼は僕をビンと呼んで良いし、僕は彼をロメオと呼ぶのさ」

はあ、男同士の通じ合いですかねえ

「そんな所さ、君は相変わらず男か女かわからないんだけどね」

わからないようにしてますからね

「そんな所もニンジャと呼ぶ理由なんだがね」

「さて、本題に入ろうか」

「UR A幹部の一人として、今の彼の動向は掴みたい」

「直接中央トレセン学園を探ってもらいたい」

随分と急な話ですね

それに、中央トレセン学園ならそちらにも話は流れているのでは？

「君も掴んでいるんだろう？」

「ロメオの奴が面白い事を始めたようだね」

「大きな話になるなら、是非共一枚噛んでおきたいのさ」

それ、問題が起きても良いように自分がバックアップに付く理由が欲しいって言ってます？

「ハッハッハ：そういうのは、言葉にするのは無料というものだよ？」

「シニョリーナへの褒め言葉と妻と娘への愛は直接言葉にするべきだが」

「男同士はひけらかすものじゃないのさ」

はいはい…しかし、そうですね  
折角です、貴方と彼の馴れ初めでも聞かせてもらえませんか？  
それで追加注文は口ハで受けますよ

「対価を求める時点で口ハとは言わないのでは無いかな？」

おや、随分とケチくさい事を

ここは男の器量を見せる場面ですよ？

「…ふう、君のペースに巻き込まれるのは御免被るよ」

「だがまあ、良いだろう」

「労働には対価が必要だからね」

はいはい、じゃ、お願いしますね

「私達の出会いは、私が妻に叱られて放り出されたのが始まりでね」

いや待って

放り出されたって、何したんですがアンタ

「いや、特には…妻とのデート最中にウェイトレスを褒めたりはした  
が…」

それじゃねえか

「そ、そうか…まあ、話を戻そう」

「頭を冷やしてこいと放り出されて、仕方なくぶらぶらと歩いていた  
んだ」

「そうしたらね、ロメオが降ってきたんだ」

は？

「いや、ことう、ひゅーんと」

は??

「いやね？ 後輩のシニョリーナに追いかけられて、階段から飛び降りてきたらしい」

嘘でしょ…

「いやいや、本当さ」

「私も驚いて、手に持っていたジュースのビンを構えてね」

「お互いに目があつて、どちらともなく笑いだしてしまったよ」

ええ…ワケワカンナイヨ

「それで、お互いに自己紹介でもと思ったんだが」

「ロメオの奴は追われてるから名前を呼ばれるのはちよつと、と言うのでね」

「なら、あだ名をつけて、それで呼び合おうじゃないか、と」

ポンポン話が転がりますねえ…

「うむ、気持ちよく会話が続いたものさ」

「それで、私が持ったままのビンをみて、ビンさんと言いついてね」  
「だから私も、シニョリーナに追われているのならロメオだな、と」

失礼ですが、子供かあんたら

「ロメオは当時はまだ学生だった筈だが？」

「子供というような年齢では無かったと思うが」  
「私も娘が生まれていたからね、子供のような気持ちでは居られなかったさ」

でもやってることは子供と変わりませんよね

「君も大概口が悪いね…」

「ま、兎も角だ」

「ロメオとは実に気があつてな、非常に楽しい時間だったよ…年の離れた友人のようであり、弟や息子のようにでもあつた…得難い、貴重な時間だった」

「気に入り過ぎて、将来うちの娘を口説いてもいいぞ、と一筆書いたものさ」

アンタ何してんだ（素

「？ 僕の最愛の天使である娘を口説く権利だぞ？ 何にも代えがたい権利じゃないか」

「ま、僕の女神である妻は絶対に渡さないがね」

嘘でしょ…

「嘘なものか、今も此処に持っているぞ」

「お互いノリノリでサインを考えて入れたからな」

嘘でしょ…（驚愕

「ハッハッハ、ロメオも最初は渋ったがね、僕の天使を見せてあげたら一発さ」

（ああ、面倒になって流されたんだな…）

「それから…確か、ロメオが何故追われていたのかを聞いて、解決策を教えたんだったかな？」

解決策ですか？

それはどのような…

「シニョリーナを褒める事は恥ずかしいことではない、堂々と褒めたまえ、とな」

「シニョリーナの笑顔を奪うのは大罪だが、笑顔を増やすことは尊い事なのだと教えただけさ」

あつ（察し）

「今も元気でやっているようだから、ロメオも男として上手くやっているんだろう」

「後は彼も、彼にとつての女神を捕まえられると良いのだがなあ…」

「まあ、僕の天使と出逢ったなら、ロメオにとつての女神だとおもってしまうかもしれないがね！」

（多分、もう出逢つてて既に口説き落とされてると思います）

そうですね…

「うむ、それで良い時間になったし、また何処かで合えば…その時はお互い名前を交換しよう」と約束して別れたよ」

「その約束はまだ果たされてはいないが…」

貴方本当に彼のことを気に入ってますね…

「そうかい？　そう見えるか！」

(なんでこんなに上機嫌なんだこの人)

「まあ、話はこんな所さ」

「満足頂けたかな？」

ええ、まあ、はい

それでは、私はアポ等の準備もありますのでこれで

「相変わらず素早いねえ、もう部屋から消えてる」

「やはり、ニンジャだな (確信)」

あー…

疲れた…

アレで敏腕・豪腕・辣腕と行く先々で様々な評価を受ける人とは思  
えませんが

しかし、彼のイタリア人的な部分はあの人の影響が少なからずあ  
る、と見るべきでしょうか…

もう少し侵食されていけば、今のような朴念仁では居られなかつた  
でしょうに、惜しいですねえ

イタリアから出向してきた当初に出逢ったダイナカールさんに一  
目惚れして、誠実に口説き続けてお付き合いに漕ぎ着けた辺り、粘り  
強さもある、と

まあ、事あるごとに叱られていたという噂の裏付けが取れたのは頭  
の痛い話ですが…

さて、愛車の整備もそろそろ終わるでしょうし…行きますか、中央  
トレセン学園

何度かアプローチを掛ける必要がありますが、なんとでもなる  
はず…

やってみせましょう

漸く見つけましたよ  
お話ししいですか…？

「おや、お客人かね…：まあ、構わないよ…：今、一区切りついたからね」

ありがとうございます

それはそれとして、動じませんね…？

「客人が来る事は珍しいが、ない事じゃあないからね、驚くほどじゃないだろう？」

いや、自分で言うのも何ですけどノンアポで来た記者とか怪しいでしょうに

「怪しいかどうか程度で判断はしていないから問題は無いね」

「ま、不埒者なら鎮圧するだけさ」

誘導バ時代に護身術教室開いてましたものね、貴方…

「フム…褒められている、と取ろうか」

「それで、本題は何かね？ 時間を取るのには構わないが、無駄にできるほど余っているわけではないんだよ、私の時間は」

おや、それは失礼しました

現役時代から今に至るまでを簡単にお聞きできれば、と

というかですね、私が言うのもおかしい話ですが

貴方の経歴が流転し過ぎなのは…？



「フム…？　そうかね？」

芝でデビューして次走からダート

条件戦で芝とダートで行き来して、チームを離脱

スカウトを受けて専属トレーナーと共に障害レースへ転向

現役引退後は誘導バとしてターフに舞い戻り、後輩への指導や現場での改善案等で活躍

かと思えば突然の退職からの大学入学

京都産業大学で生命システム学科で学び、卒業と同時に静岡大学に編入学

現在は博士課程で光医学工学研究科にて何やら開発している、と

此方で掴んだ情報では、ウマ娘の脚部治療の為の装置だとか？

「君は、中々に優秀なようだね」

「一応は秘匿研究なんだがねえ…表向きは医療器具の改善案を洗い出している事になっていたんだが？」

蛇の道は蛇、というやつですよ

「ふうむ…そこはまあ、構わないんだがね」

「そこまで調べてあるなら、私の口から語る必要があるとは思えないのだが？」

調べたことが全てではないでしょうからね

やはり、お聞き出来るなら、というものですよ

「まあ、その辺は解らなくは無いな…」

「良いだろう、デビューの頃から話せば良いのかな？」

ええ、それでお願ひします

「私は最初、選抜レースを経てチームに入った」

「その次の週にはダートで出走、クラシックの4月までだったかなあ…ダートで走り続けたものさ」

「残念ながら、勝利は条件戦で一度だけだったがねえ」

論鶴羽山特別、アタマ差勝利のレースでしたか

「うむ、こう言っただけだが、芝もダートもしっくりこなくてね」

「そんな中で勝てたレースだったから嬉しくはあったさ」

「だが、私の中ではダートでは無い、と感じていたのも事実さ」

条件戦の露草賞を最後にチームを離脱されましたが、それが理由でしょうか？

「それが全てではないが、そうだね…」

「まあ、今ならいいかな…あれから10年以上たってるし…」

「実は、トレーナーにスカウトされたのが切っ掛けだったんだよ」

えっ？

基本的に、双方の同意ありき、とはいえ

トレーナー側が決定権を、ウマ娘側が選択権を持っている関係で色々と暗黙の了解があったと聞いてますが…

(根本的に生徒側を選ぶ自由と教育者側に決断の責任がある、という事らしい)

例えば、積極的な引き抜きや、移籍を焚き付けるような真似は厳に慎むといった感じで

「その認識は合っているよ」

「トレーナーと出会ったのは本当に偶然だね」

「その時、私の関節や筋肉の柔らかさ、バネを見て障害で走るのも面白そうな素材だな、と」

「そんな独り言を言っていたのを私が聞いたただけだったんだ、最初はね」

最初は？

「トレーニングで見かける度に私がアドバイスを求めてね、それでそれなりに親しくなったのさ」

「勿論、褒められた事では無い」

「だが、私は私が感じる違和感の解消の…手がかりだけでもいいから、欲しかった」

感覚的なモノは当人以外には伝わりにくいものですからね…

「感覚を言語化して他者に理解できるように伝達する、この難しさはいつになっても変わらないな」

「感覚だけに曖昧な部分も多くなるしねえ…ま、それは別にいいんだ、今は関係ない事さ」

「チームでは私は浮いていた、というか…まあ、馴染めていなかったからね」

「良いチームではある、と感じていただけに、忍びなくてね」

忍びない、ですか？

「そうとも、私は勝てない事よりも、違和感の解消を気にしていた」「練習にも励んではいたが、それでも勝つためのトレーニングを積むチームの者達とは着地点が違うからね」

「それで結果を出しているならまだしも、結果も出さずに毛色が違う者が混じっていれば、それは不和の種にもなるさ…残念ながらね」

「夏合宿を前にしてチームから離脱したのは、コレ以上私の事情で空気を悪くするべきではないと考えた結果さ」

(言うほど当時のチームは気にして無かったようなんですがね…むしろ、力になれないから申し訳ないとかそういう風に思っていたらしいので、空気が悪く云々は違う意味であってそうなのがアレですが…)

「そうして、フリーになってレースにも出れなくなったウマ娘が一人出来上がったわけさ」

「脱退したその日にトレーナーに出会ったのは、良かったのか悪かったのか」

「普段ならアドバイスを求めてくる私が静かだったのが、余程意外だったのだろうね」

「あの御人好しのトレーナーは、根掘り葉掘り聞いてきたんだ…いやあ、懐かしい」

御人好し、ですか？

此方が調べた限りでは無口無表情の鉄面皮

新人トレーナー一年目でサブトレーナーとして研修

二年目はあちこちに研修の名目で助手のような仕事を請け負って走り回り

二年目の夏合宿前に貴女をスカウトした、という流れだったと思うのですが？

「はっはっは…うんうん、外から見ればそれは正解だね」

「が、真実は少々異なる」

「先ず、彼女はサブトレーナーとして業務を請け負った理由だが…シンプルに、担当が付かないことを心配されて、直接の先輩に声を掛けられたそうだよ」

は？

「二年目の仕事を請け負っていた、というのは、彼女の仕事ぶりが先輩から漏れて、手伝ってほしいと先輩の同期連中に言われたのを受け入

れたからさ」

「夏合宿前に頼まれた仕事を終わらせて、ウマ娘とのコミュニケーションもそれなりに取れるようになったのだから、担当を探してみろ、と送り出された所で私と出会った」

「私が担当になった時に、先輩とその同期連中が祝いの品を持ってきていたので確かめたから、間違いないよ」

はあ…

つまり、鉄面皮でうまくスカウト出来ないのを心配されて

サブで色々なチームのウマ娘とコミュニケーションを取る事で慣れさせて？

大丈夫かな、と心配されながら送り出された、と

「うむ、良い理解だ。アレで案外愛され系というヤツなのだよ」

「何というか、付き合いがある人間には好かれるが、付き合いが無いと距離を取られるというタイプだね」

「ま、話を戻そうか…トレーナーは私の違和感解消の手掛かり探しに付き合ってくれていたのもあったからね」

「その場で専属契約を結ぼう、と言われ、そのままあれよあれよと言う間に先輩連中の合同合宿に連れていかれてね」

あ、強引というか、勢いよく話を進めるのは本当なんですな

「そうだね、トレーナーは決断したら躊躇いを持つことは無い人だったね」

「合流してからは様々なタイプのウマ娘がいたからね、色々試したよ」

「その中でも、一番違和感なく走れたのが障害レースの練習だった」

「そこからはトレーナーが一気に動いてね、私を障害レースに転向させて、出走登録まで済ませてきたんだ」

そこは相談とかは…？

「いや、私が最初に任せるから、良い時期の良さそうなレースを見繕ってくれと」

「移籍した翌月の走ったこともない障害レースに登録してきたのは想定外だったかねえ」

「流石に合同合宿していた先輩連中にも心配されたが、そこはそれ、飛越練習用の短距離コースを流して見せたら色々教えられたよ」

「中には、手作りの練習用障害なんて持ってきて、私に並走練習をさせてくれた人もいたね」

わあ、優しい世界（震え声）

「そうでもないさ、障害レースは出走者も少ない」

「十分な練習を積ませようにも、並走なんてまず出来ないからね」

「そういう意味で、お互いに利があると判断しての行動だったのだからさ」

「後々、色々な意味で長い付き合いになったギフトッドクラウン先輩との出会いもここだね」

貴女同様に、芝ダートを走ってから、障害レースに転向

東京オータムジャンプや小倉サマージャンプを制した、あの…

「うん、戦歴に目を通した時によく似た戦歴だな、と思つたものさ」

「それだけに、競争中止で倒れた彼女の姿はよく覚えているよ…」

「私は最後のレースも走り切つて、故障が発覚した」

「治療に専念して一か月様子をみるも、回復しなかったために引退を選んだ」

「だが、彼女はレース中の負傷に気づかず走り切ってしまった…」

復帰は絶望的、として引退を表明でしたか

車椅子で引退発表をしていたので、私も覚えていますよ

「私も引退したばかりだっただけに、酷くショックを受けた覚えがある」

「先輩は私の分まで走って来る、なんて言っていたからね」

それは…

「無論、それで私のせいだと喚くつもりは無いさ」

「だがね、先輩が走り切ってしまったのは、私に言った一言があったからかもしれない、そう思うのは止められなかったよ」

「まあ、本人に突撃されてごめんねーって言われて面食らったのは…良い思い出…？　なのかなあ…」

えっ？

「いや、ニュースの引退会見は録画だったんだけどね」

「見る最中に先輩が突然突撃して来てねえ…」

「で、ごめんねー、私も引退しちゃったーって、笑いながら言うんだよ」

「とても…とても、面倒見のいい、優しい先輩だったからね」

「心配させてしまったんだらうね、私が気に病むのでは、と」

「それはそれとして着替えまで用意して泊まり込みでパジャマパーティー開催して帰って行ったのはどうかと思うが」

は、はあ…

マイペースなんですか…？

「ああ、そうだね…レースでもマイペースで、崩れない人だったから…本当に手強かったんだ…」

阪神ジャンプSと京都ハイジャンプですか？

「うん、私が制したレースだが、先輩も本当に強かった」

「飛越で差を付けても、マイペースにスパート位置を探って、走る」

「先行されている状況で、冷静にそれをやるのがどれだけ難しいか…」

ウマ娘の闘走心の強さを理性でねじ伏せる

レースを走る上でどう折り合いをつけるのか、難しい問題ですよ

「その通り、だからこそ私は先輩を尊敬しているのさ」

成程…

ギフテッドクラウン先輩大好き♡ということですね？

「〇すぞ」

冗談です（震え声）

「フン…ま、いい。話を戻すか」

「続く中山グランドジャンプで惨敗、同時に故障発覚で引退は先に話した通りだね」

元春の中山大障害、障害G1の大一番、ですか

「そうだね、グランドジャンプと中山大障害は、障害レースを走る者には掴みたい頂きだからね」

「まあ、悔しかったが…同時に満足もしていた」

「違和感なく走り、跳ねて、駆ける」

「それでいい、と思えたんだよ」

「先輩の故障引退を見て、進むべき道を決めたのは、この時の満足があったからかもしれないなあ」



進路決定の切っ掛けですか

「そうだね、所でウマ娘は免許証や資格試験等の一部に緩和措置が設けられている場合が多い」

「何故だと思うかね？」

え？ いや、それは…何故ですかね？

「これは個人的な推察でしかないがね、レースを走らなくなったウマ娘の本能がどこに向かうか、わかるかね？」

「様々な方向に行くが、問題が起こる頻度は少くないのだよ」

「これは、闘走心が特に強い者に起こりやすい」

「それを回避する為の措置、その一環であると私は考える」

「目指すものに手を伸ばせる環境、というものが有ると無いとでは随分違うだろうからね」

それはまあ、試験そのものは同一であったりしますが、受験資格が緩和されているケースは確かに多いですが…

「これにはもう一つの面があつてね」

「こうでもしないとトレーナーの奪い合いに乗り出す者が増えてしまうのではないか、と考えている」

は？

「海外では一人のトレーナーが複数のウマ娘に狙われた結果、事実上の重婚状態に追い込まれるケースが散見されている」

「このケースはレース以外に目的、というか目標かな？ それが存在しない場合に陥るパターンと言える」

「年々、URA理事会への多夫多妻制度認可を嘆願する書類は増えているんだよねえ」

あの、それって部外秘なのでは？

「なあに、噂話から推察した、単なるたられれば話さ…そうだろう？」

アツ、ハイ

「今では事実上の一夫多妻を黙認している国も増えていてね…」

「財産分与等でもめる事が無いように、法整備に慎重になっていると  
も取れるが」

「URA理事会は世界中に根を張っている。組織としても無視でき  
ない規模だからね」

「そこから提案として流れてくれば、完全無視も難しい話だろうさ…」

ええ…その話聞いてていいんですかねえ

「名家や財閥連中は、囲い込んで年頃のウマ娘のトレーナーとして宛  
がいが、最終的には一族に引き込む…そういう流れは少くないよ？」

あ、すいません、この話はここまでお願いします（土下座）

「ま、良いだろう…では、現在の進路に至るまでの話をして、締めとし  
ようか」

「先輩の故障引退、私自身の故障引退」

「ウマ娘のレースに故障引退は付き物、とはいえ」

「故障から復帰出来るなら選択肢は増える…」

「だから私は治療の手段を増やせないか、と考えたのさ」

ふむ？

でしたら誘導バとしてのお仕事は何故…？

「実にシンプルさ、ターフで見るウマ娘から最も奪うべき故障を見極めていたんだ」

「データで見ればそれで済んだかもしれない、だが、私は実際に見て考えたかったんだ」

「そして、私なりに見極めた結果、屈腱炎の克服を目指せないかと…そう、強く思ったんだ」

「それで、突然の退職と大学入学となった訳ですか…」

「うむ、生命システム学科で現在の治療法以外のアプローチや、より効果的に治療を施すには何が必要かを考え続けた」

「結論としては、今以上に器具や設備を向上させて、より繊細な治療を可能とする」

「その方向性に進んだ訳さ」

卒業してから編入学して光医工学研究科で博士課程にまで進んだのはそういう事ですか…

「時間はかかったが、まずまずのモノが出来たと思っっているよ」

幹細胞移植治療、ですね？

「その通り、あの治療法は画期的だった…」

「それだけに、限られた設備や器具での対応しかできなかつたが…」

「私達のチームで開発した検査機器や治療の補助器具は、まだまだ高価なものであるがね、間違いなく治療を受けられる数は増えるだろう」

「今後はより廉価で機能を落とさずに作れるようになれば、一区切り」  
「そこまで行くのは未だ遠い道のりだが…踏破してみせるさ」

「さ、これで話はおしまいだ…インタビューとしては申し分ないだろうっ」

ええ、まあ、はい

それでは、今回はありがとうございます、アイディンサマーさん

額に白い星を持つ鹿毛のジャンパー

通算成績21戦4勝

芝もダートも走り、障害レースへ転向した彼女は、そこで天性のジャンパーとして開花する

阪神ジャンプS、京都ハイジャンプ

この二つのレースで、彼女は障害を越える度に加速する走りを見せました

トレーナー曰く、障害が多いほど彼女は早くなる、と

それだけに春の中山グランドジャンプでの敗戦と、故障発生に関係者は深い悲しみに沈んだそうです

引退後は誘導バとしてターフに戻り

後に京都産業大学に入学、卒業と同時に静岡大学へと編入学

現在は博士課程を修めつつ、医療器具や設備の開発に注力しているそうです

当時のトレーナーにお話を伺ったところ、予防が難しいので治療法しか探せない自分を不甲斐なく思っている、との事

志は高く、レースで障害を越えていた時のように、超えていく姿を見せてくれることを期待したいですね

さて、次のインタビューは…

File ??

「いやあ、今回は突然すみませんねえ」

いや、問題はないっス

キッチンと手続きした上で、アタシへの取材って事で来てもらって  
るっスからね

んで、何が聞きたいっスか？

「いえね？ 先日お邪魔した時に、サイレンススズカさんの蹄鉄のテ  
ストを見せて頂いたんですが…」

「その後、装蹄師の先生が麻袋に詰め込まれて拉致された、という噂を  
聞きましたねえ」

あー…

それっスか

まあ、間違った情報が流れるのもよろしくないっスね  
お話ししましょう

「おお、ありがとうございます」

先ず、拉致っていう所っスね

これは文字通り拉致っス

「ええ…」

いやいや、ちゃんと理由もあつての行動なんスよ

ゴールドシップさんはハチャメチャで問題児っスけど、理不尽なこ  
とはしないっスから

ざっくり説明すると、先生が休憩に入ったのを見計らって、ゴールドシツプさんが麻袋で確保

そのまま抱えて病院へ搬送した、ってのが事実っス

「何故麻袋…?」

さあ?

そこは本人に聞いてみないとわからないっス

ともかく、今回の噂は間違っではないっスけど、事件性は無い、って事っス

何より、実際に見てたアタシですらほればれするような鮮やかな手際で運んでたっスからねえ

「えっ、実際に見てらしたんですか?」

ええ、まあ

ただ、あんまりにも鮮やかにやり遂げられたんで、止める暇も…  
というか、止めるって選択肢すら浮かばなかったっス

「それはまた、無駄に無駄のない洗練された無駄な技術ですね」

そっスねえ、一つ一つの技術とかは物凄く高度なモンだとは思いますが  
すよ?

生活の役には立たないし、レースでも使うかわかんないっスけど

「それほど、ですか…詳しくお聞きしても?」

あ、いっスよ

まだ時間もありますし

アタシは、風紀委員の巡回をしてたんですがね  
偶々、先生の工房の中が見えてたんですよ

普通の鍛冶場と違って、割と大きな窓もついてますからね

ま、最近の鍛冶場は昔ほど薄暗い場所って訳じゃないそうっすけど話戻しますけど、先生は工房の中で、作業机に座って休んでたんすだから窓からも良く見えたってのもあるっす

先生が座り込んで、自分の右手を眺め始めたタイミングで、ゴールドシップさんが音もなく出てきたんす

こう、ぬるって感じっすかね

滑らかな脚運びと体重移動で、文字通り滑るように先生が座ってる場所までよってって

そこから全身のバネを一瞬で溜めて、ふわっと浮かび上がったと思ったら、いつの間にか手に構えていた麻袋で…

ああ、この麻袋もかなり大きなものだったんですけどね、普通はあんな風に振り上げて、振り下ろす

それだけでも結構な音がするんすよ

なのにゴールドシップさんは音を立てずに先生を袋に包み込んでましたね

アレは多分、片側の口だけじゃなくて、両側の口が開いた状態で振ってたんでしょうね

で、先生を袋に入れながら飛び出さないタイミングで口を絞め、持ち上げた後に反対側も閉じる

それだけの作業をこなしながらも音自体は立てることなく、尚且つ、確保した先生に負荷をかけるような体制にもせず、というのは…

正直に言えば、制圧術としてはこの上なくレベルが高い動きでしたね

懂れるレベルっすよ…まあ、ゴールドシップさんに懂れるとか危険すぎる事はしませんけど

そこまでの無音制圧が嘘だったかのようには大声を出してたのは、多分先生に自分がやっている、と言うのを伝えるのが一つ、何故やっているのかを伝えるのが一つ、協力者への連絡も兼ねていた、というのが実際のところじゃないっすかね

そこからの身のこなしもこれまたレベルが高かったっすよ

肩に担ぎ上げるようにして抱えつつ、麻袋の中の先生の態勢を把握しながらバランスを取って、尚且つ先生への負担は最小限に抑える  
しかも、それらをこなしながら全身の関節を非常に柔らかく使いながら、揺れや加速の負荷を感じにくいようにしつつ、かなりの速度域を維持しながら走って行きましたからね…

あれだけ出来るからこそG1バに成れたのか、或いは、G1レースに臨む時と同じかそれ以上の心持だからあれだけのパフォーマンスを発揮したのか…

ま、その辺は野暮ってモンっスね

因みに、あのスペシャルウィークさんがぶつちぎられてたって言えば、どんなペースだったかわかると思うっス

「えっ？ 人一人抱えた状態で、ぶつちぎるって…ええ…」

ま、ゴールドシップさんだから考えるだけ無駄っス

さて、お話出来るのはこのくらいですが

「いやいや、十分すぎるほどにいいお話が聞けました、ありがとうございます  
いました」

そりゃよかったっス

じゃ、また何か取材したかったら、ちゃんと学園通してくださいっス

「はい、本日はありがとうございます、それでは失礼します」

拉致の協力者を聞く気にならないレベルのかつとび具合なゴールドシップさん、流石っス



何してるんですかねえ…？

「ふおえ？」

いや、先ずは口の中のモノをちゃんと呑み込んでくださいよ…  
その両手に抱えてる駄菓子は一旦置きましょ？  
いや、なんで食べ続けてるの…

「んぐんぐんぐ」

あー、もう…

急かしたりしませんから…ほら、もう…こんなに零して…  
食べ終わりましたね？

じゃ、何でここにいるか説明 please

「ふー…あ、冷蔵庫のニンジンジュース貰っていい？」

あーもう…どうぞ

キミといい、あの子といい、遠慮しませんねえ…

「？ トモダチに変に遠慮する方が失礼でしょ？」

親しき中にも礼儀ありといいましてね？

「あ、そんな事より鍵あいてたよー、物騒なんだからちゃんとしないと

ダメだよー?」

そんな事じゃなくてさあ…

いやまあ、鍵開いてたつていうのは…

まっつて、開いてた?

鍵は間違いなく掛けたんですが

「なんか怪しいのが居たから捕縛しといたよー」

それ泥棒じゃないですかねえ!?

警察に連絡しましたか?

「自決しようとしてたから警察じゃないかなーつて」

あー…そっち側ですかあ…

怪我とかは無かったですか?

それと捕縛した賊は?

「そこは慣れたもんだからね、無傷だよ。怪しいのはビニールテープで後ろ手にして親指縛った後グルグル巻きにして転がしてる」  
「自決防止に雑巾噛ませてビニールテープ巻いておいたよ、一応オトしておいたし」

相変わらずいい手並みですねえ…

指導した側としては鼻が高いというべきか、友人として危険な事は避けなさいと言うべきか…

まあ、内調の友人に連絡しましたから、引き取りに来るでしょ

「今度は何に頭突っ込んでるのさ、資料を漁ってたのを不意打ち出来なきやヤバかったよ?」

えー…資料漁ってたって事は…ううん、アレ、かなあ…

「何やってんの…？ 犯罪は駄目だよ？」

犯罪じゃないですよ、失礼な

一夫多妻制度認可の根拠になりそうな資料を纏めておいただけなんですかねえ…

「それ、詳しく聞いてもいい？」

なんでそんなに食いつきが良いんですかね？

キミらにはまだ関係無い話でしょうに

「まー、良いからさ。 話せる内容ならちよつとだけ教えてよ」

んー…

じゃあ、後で交換条件として話を聞かせてもらいましょうかね

「OKOK、それで良いよ」

じゃ、まあ、軽くね

ウマ娘の本能に関わる研究結果と論文を纏めましてね

ざっくり説明すると、走る事、競う事、そして群れを作るというのがウマ娘が本能的に求める事って論文がありましたね

その論文と、群れを否定した場合と、群れを肯定した場合のコンディションの変動何かを6年間かけて24チーム分の人数を用意して調査した結果報告書つてのをあわせて

その上で群れの有用性とメリットデメリット、必要になるモノなんかを纏めた資料になってるんですけど

結論から言うと、トレーナーと親密であり、尚且つ群れとして機能した場合平均値はかなり上振れる、という事と

トレーナーを群れのウマ娘が共有…と言うと聞こえが悪いですけど、事実上の一夫多妻状態にする事で、ウマ娘側のコンディションと成長曲線に良い影響を与える

そんな感じに纏めた資料と

現時点でのトレーナーの継続率

もつとはつきりいうなら、消息不明にならなかったトレーナーと、消息不明になったトレーナーの違いを数字に出して

その上でベテランの既婚率とかも合わせて用意した資料ですね

「…ヤバい資料には聞こえないけど？」

ヤバいのはガチでヤバいのでちよつと…

そつちも数字を纏めたモンではあるんですけど…

その、勢力がね？

「あー…そういう？」

そういう

ま、此方が話せるのはこんなものですね

じゃあ、交換条件のお時間ですよ

「うえーい。 お使いでこつちに顔出したんだよ」

お使い…？

あつ、また商店街で甘やかされましたね

その上で締めめに駄菓子屋で買い物してここに来た、と

「そそ、 んでお使いの内容はコレ」

封筒…今読んでも？

「大丈夫じゃない？ 特に言われなかったし」

ええと…

何で事後承諾で私の資料使った工作してるんですかね??

しかも私の名前でやってるけどいいよねって…

いや、良いですけどね？

将来的にはインタビュ―相手になると思いますし？

なんで先に連絡入れない…ああ、成程

時間的に猶予が無く、タイミングを外しては意味がない仕込み、とそれならまあ…

「納得した？」

理解はしましたが納得はしてませんよ？

ま、貸し一つですかね

「はいはい、借りとく借りとく」

まったく…じゃ、ついでにインタビュ―もやっときますか

「じゃーこれで清算ってことでー、オネガイ♡」

くっ、あの子といい君といい、自分の可愛さを理解してそういう事するのズルくないですか？

「産まれたの幸運というものだよ♪」

ハイハイ…じゃあそれでいいですよ

じゃ、一緒に暮らしてた頃の話でもお願いしますよー

「おー兄さんの話だねー、了解了解」

「かーさんが連れてきて同居を始めて、アタシとこk」

まって、まって

かーさんて何？ あと名前を出すのはやめなさい

「(現時点では) あだ名って事で」

ええ…まあ良いですけど…

「じゃ、話戻すけど…アタシと妹で」

まって

え、妹って、違うよね？

「姉より優れた妹など居ない！ という事でアタシが勝ち越してるからアタシが姉なんだよ」

あー…まあ、そっちの事情には踏み込みませんからね？

どっちかに肩入れしたら拗れそうですし

「うんうん、そうしていたまえ(エツヘン!!)」

「んで…何だっけ？」

彼が来てからの話ですよ

「おー、そうそう。 お兄さんのお世話してた時は別にそうでもなかったんだけどさ」

「まー一緒に御風呂入って背中流したりとかしてて」

wait

御風呂？

「御風呂だよ?。」

裸で?。

「服とか水着とか着てお風呂入るとかバカじゃない?。」

ソウネ

まあ、小さい時だけでしょ?。

「?」今でも顔出してくれた時は一緒に入るよ?。」

ええ…

いいのかなあ

「家族みたいなもんだから良いんじゃないかな」

「そうそう、妹なんてお兄さんが元気になってきたらずっとやってた事があるんだよ?。」

ほほう?。

「家に帰って、ただいまって言ったらすぐさまお兄さんに引っ付いてねー」

「もうべったり、ご飯の時もお兄さんの膝の上から動こうとしなかったりしたなあ」

「かーさんにお行儀が悪いですよ! 食べ終わってからにしなさい! って叱られてたっけ…」

何だろう、家族のエピソードにしか聞こえないんですが

「?」だって家族のエピソードでしょ?。」

アツ、ハイ

続きどうぞ…

「変なの：まーアタシもお兄さんには良く甘えたかなあ」

「台風が来た時なんかさ、アタシと妹で布団に突撃しちゃってねー」

「かーさんとお兄さんの間にアタシらが入って一緒に寝たりしたなあ」

（ただの若夫婦と子供の思い出かな？）

「半年だけだったけど、毎日が楽しかった時期だったね」

「あ、アタシと妹の授業参観にもちゃんと来てくれたんだよ、二人でさ」

「周りの子がお父さんお母さんに見られながら授業受けてるのがさ、結構羨ましかったんだ」

「二人で来てくれたのはその一回きりだったけど、ホントに嬉しかったなあ」

「アタシも妹も、後でこっそり泣いちゃったくらいに、凄く嬉しかったんだ」

…  
彼女に引き取られるまで、中々に大変だったと以前言っていたのは

「ま、そういう事。ありふれた不幸の一つってね」

「けど、今は幸せに生きてるから問題ないかなあ」

「まー、それだけにアタシ達はお兄さんにべったりになっちゃってたからさー」

「お兄さんが出ていくって言い出した時はギャン泣きしたね、二人で」

えっ



「もう顔中べっちゃべちやにして全力で駄々こねた覚えがあるよ」

あの、ちよつと駄々こねたって聞いてたんですが

「見栄張っちゃってさー、二人がかりですんごい駄々っ子してたもん」  
「特に妹は自分も一緒に行くとか言い出してさ、最終的にはお兄さんに説得されてたけど」

「アタシはこつから通えばいいじゃんとか、もー叫びまくってたね」  
「かーさんは、決めた事なら仕方ないですねって：すつごいしょんぼりしながら言ってたね」

ははあ…あつ

「でもさー、妹は別れ際にお兄さんにty」

「黙れ（メシイ）」

妹さんが後ろに、って：後ろからアイアंकローで釣り上げるとか

：

しかも掴む瞬間に意識飛ばすとか容赦ないなあ

「ハア？ 誰が妹だし」

いや、彼女が姉より優れた妹など居ないとか

「OK、コレは連れて帰るから」

「お客さんも来てるわよ、今玄関で一緒になつただけけど」

了解、じゃあ帰りは気を付けてね？

「アンタも、危ない事は程々にね？ 心配するでしょ」

心配は受け取っておくよ  
まあ、無理はしないさ

「ん、じゃあ、またね」

うん、またね

あ、お客さんですか

荷物はこちらになります

恐らく裏は無いと思いますが念のために、ね？

じゃあ、後はお願ひしますね

さて、先ずは部屋の片づけ、かなあ？

今回は急なお願いにも関わらず、快くインタビューを受けて頂いありがとうございます

「いえいえ、私の話で良いなら喜んで」

早速ですが、装蹄師の彼の後輩だったとか

大学時代のお話を伺っても？

「OKですよー」

「大学入った頃は家庭の問題というか、環境が普通とは違ったんだと気づいたタイミングだったんですよ」

「それで、遅れてきた反抗期というか…大学入学を期に独り暮らしを始めたんですよ」

反抗期ですか、まあ、家庭の問題というのは当人たちには大問題ですからねえ

「ですよねえ、従妹だと思ってた子が畑違いの妹だったとか普通びつくりしますよねえ」

まって、これ取材なんですよ？

記事にするんですよ？

大丈夫なんですか??

「いや、後々知ったんですけど、名家とか名門だと割とある話だそうだし…」

「偶々そういう側に産まれたんだと理解しましたよ…」

ええ…

「あ、戸籍上は従妹ですよ？」

「私が成人するまでは分家の未婚の母とその娘で押し通してましたから…」

あの、これホントに記事にしているんですかね？

「だーいじょうぶですって」

「話戻しますけど、一人暮らし始めて、ガツコもバタバタしてて」

「割といっぱいいっぱいだったんですけどねー」

「頼りになるのかならないのか判断に迷うけど頼れる先輩方と知り合ってしまったって…」

え、あの、装蹄師の彼ですよ？

「先輩というか、先輩一味というか…」

一味って何ですか、不穏な言い方ですけど

「先輩と、先輩が可愛がってる後輩と、全力でバカな事を始めて先輩たちを巻き込むヤツとで良くつるんでたんで…その、学校関係者からはワンセット扱いされてたんですよ」

あつ（察し）

「で、困ってる所をおバカ先輩に絡まれて、割って入ってくれた先輩にお世話になって…」

「講義とかサークルとか…まあ、他にも細々とした事までお世話になりましたね」

な、成程

「良く遊びにも連れて行ってもらったり…楽しかったなあ…」

「あ、レースも見せてもらいましたね、クルマの奴」

色々イベントがあったみたいですな

「そりやもう、盛りだくさんでしたよ？」

例えばどのような？

「大学構内一周流しそうめん事件とか」

待って

「はい？」

流しそうめん？

「そうですよ？ ビニルパイプと給水タンクを用意してやってみましたね」

「タンクは老朽化に伴って交換されたヤツを綺麗に掃除して使ってしまったね、確か」

「ビニルパイプは窓の前を通るように這わせて、御丁寧にめんつゆと薬味を置いておく台まで設置しましたね」

無駄に壮大な規模でちっちゃいことしてますね

「ですよー。どこからかゾロゾロ舎弟が湧いてきて、2時間くらいで設置終わらせてましたよ」

???

「深く考えない方がいいですよ」

アツ、ハイ

「後は…学際でエンジンの熱でポン菓子とか作ってましたね」

「それと板金で1分の1ミニ四駆制作とか、旧校舎モトクロスバイク走破レース、モデルガンでの曲撃ち早打ちと…あ、小学校に手打ちうどん、というか足踏みうどん作り体験とかやりにもいってましたね」

最初と最後以外が思ってたより酷い!?

「えっ?」

えっ?・

「いや…おとなしめでしょ?」

(おとなしく) 無いです

「ポン菓子は初代スーパーカブのエンジンが見つかったからって、並べて臨界までぶん回したついでに作ってた感じでしたけどセーフでしよ?」

普通はまず臨界までぶん回すとしてもそれを長時間維持しようとは思いません

「でも初代カブのエンジンとか頑健性を実際に確かめたくありません?」

気持ちはわかる

「でしょ？　じゃあセーフで」

「板金フルスケールミニ四駆は、廃車置き場から綺麗なフレームが見つかったからって調子に乗って遊んでただけですね」

普通は板金で遊ぶという発想は無いです

「でも、憧れのマシンをガワだけでも再現していいってなったらやりたくないですか？」

うっ…それは、まあ、見たくないと言ったら？　になりますけど…

「やはりロマン、ロマンは全ての答えですね、これもセーフと」

「旧校舎レースは…これはまあ、頭悪いですよねえ…」

あ、そこはフォロー諦めるんですね

「ええ、まあ」

「先輩がレース用モトクロスを用意したんですけどね？」

「参加した面子がおかしかったんですよえ」

いや、それ以前に旧校舎とはいえ、屋内でレースとか…

「あ、設備の旧式化と耐震構造の不足が指摘されて、残しておく訳にもいなくなっただけから解体しましよって話がまずあったんですよ」

「で、敷地を遊ばせるのも何だから、建て替えるかって事で、研究室棟の新築という形で落ち着いたんだそうです」

あ…震災の結果、耐震設備やそもそもの構造が見直されましたからねえ

しかし、それだと旧校舎でレースをする必要もないのでは？

「そうですね、でも先輩達が、最後に思いっきり使い倒して感謝しよ  
ぜ、って」

「一部の教授とかもノリノリになっちゃいましたねえ…」

「教員側でレースに参加したのが、本郷先生、一文字先生、風見先生に  
結城先生」

「先輩の伝手で外部招待枠で来たのが南さんと秋月さん」

「レギュレーションは50ccの用意されたマシンを、前日からカスタ  
マイズ可能、但し使用するパーツは規格品のみ、って縛りでしたね」

「すみません、そのレース映像残ってませんか？」

「え？..」

えじやないが

はよ、レース映像はよ

「あの、急にどうしたんですか？」

いや、レジェンドライダーとマニアの間では絶賛されてる元プロの  
本郷さんのレース映像とか見たくないわけないでしょ？

国際レースも幾つか制覇したヒーローですよ？

「本郷先生元プロだったんだ…」

確かに若くして引退してしまったので、知る人は少なくなっている  
と思いますけど

マニアなら一度は憧れるようなレジェンドもレジェンドですよ

それに南さんと秋月さんは現在活躍中のレーサーですよ？

国外の大会がメインですから、あんまり馴染はないかもですが



「そんなに凄い人なんだったんですか…」

貴女方にわかりやすく言うと、セントライトさんとシンザンさん、クリフジさんが野良レースに参加してるようなモノですからね？

「成程、それは絶対に見たいですね」

でしよう？

だから映像はよ

はよ

「一応資料室には収まってると思いますけど、部外者は閲覧禁止だったと思いますよ？」

もう盗み出すしか…

「いやいや、ちゃんと許可取れば見れる筈ですから！」

そうですか…では、後で申請に行くとして…

話、戻しましょうか

「は、はあ」

「曲撃ちと早打ちに関してはおバカ先輩が主導してましたね」

「後から聞いたんですけど、用意したのが実銃を改造してモデルガンにしたそうです」

…逆ではなく？

「はい、実銃の重量バランスなんかは一切変えずにモデルガンに作り替えたそうですよ」

「カートリッジも金属薬莖を利用して作ってた辺り、徹底してましたね」

樽以上の変人じゃないですかね？

「これ、まだマトモな部類なんですよ…」

なんか色々壊れそうな…ま、まあ気を取り直して

曲撃ちと早撃ちの内容はどういったものだったんで？

「曲撃ちは目隠しをしたまま、音楽に合わせてターゲットを撃ち落としていく、というモノでしたね」

「リロードをする係としておバカ先輩が控えて、撃ち終わったら投げ渡し、リロードが終わったら投げ渡して、モデルガンのやり取りもジャグリングみたいになさしてましたよ」

「最後は空き缶をトランプタワーみたいな感じで積み上げたのを連続で撃ち抜いて終わりでしたけど、まー拍手喝采でしたね」

「一発も外さなかったのと、最後に撃ちあげた空き缶を連続で撃って空中に残して、最後におバカ先輩に当ててましたね、空き缶を」

器用とかいうレベルじゃないんですが…？

「先輩達は、遊びは全力で、手抜きは一切無しって感じでしたから…」

「早撃ちも凄かったですよ、並べた空き缶がほぼ同時に吹き飛ぶとか意味わかりませんでしたし」

ボブ・マンデンかな??

「まあ、そんな感じで色々やってみましたね」

「あんな事が無ければ、ずっとそうだったのかなあ…」

あんな事？

もしかやレースでの

「ノーコメントで」

「ま、それとは別口で少しあったのもありますね」

と聞いていますと？

「先輩に私のお父さんになってくださいってお願いしに行っただんです  
よね」

ん???

「先輩は私の父親になってくれたかもしれない男性だ！」

いきなりどうした

「あの包容力、距離感、落ち込めば励まし、悩めば寄り添い、踏ん切り  
がつかなければそつと背中を押す」

「そんな先輩に父親になってほしいと思うのが間違っているだろう  
か、いや間違っているわけがない！」

あの、落ち着いて？

「とまあ、そんな勢いで先輩を追いかけまわしてたんですが」

「ある日を境に、先輩の対応が変わりましたね？」

あつ（察し）

「逃げ回ってた先輩が、正面から向き合ってくれたんですよね」

「で、はつきり父親には成れないが、父親のような先輩って線で勘弁し

てくれて」

「苦笑いしながら、少しだけすまなさそうにして、優しく撫でながら言われちゃったんですよねえ…」

ソウナンデスカー

「なんだか、ドキツとしちゃって…それで、じゃあそれをお願いしますって言っちゃったんですよ」

「それからはまあ、ベツタリでしたけど」

「それも、先輩が大学から距離を取っちゃうまででしたけどね…」

成程…それで、現在は何を？

「マツサージのお店やってますねー、主にウマ娘専門になってますけど」

「そろそろ店舗移転しようかな、と考えてますけどね」

「テナント借りてやってるんで、新築しようかな、と」

おや、繁盛してるようですね

「ええ、有難い事に」

「ただ、学園からそれなりに遠いので、近いところにあったら、とか結構言われましたね」

「今は土地の確保中ってところですよ」

そうですか…

それでは、益々の発展をお祈りしつつ、そろそろ締めとまいりますか

「あ、ハイ」

「じゃ、最後に宣伝を…」コホン」

「ウマ娘専門マツサージ、ミネラルsを御鼻屑に！」

はい、本日はありがとうございますございましたミネラルシンボリさん  
本当に貴重なお話を聞けて嬉しく思います

戦績13戦3勝 鹿毛をポニーテールに纏めて走り抜けたミネラルシンボリ

重賞レース日本短波賞、後のラジオたんぱ賞、国際競争G3・ラジオNIKKEI賞となるそれを制した

次走のセントライト記念や菊花賞では大敗、結果として最後の勝利が最初にして唯一の重賞勝利であった

シニアに上がってから約一年の休養を挟んで復帰レースに挑むも敗戦

次走の条件戦に敗戦と同時に引退と卒業を決定（大学入試はこっそり受けていたらしい）

卒業式のスケジュールが合わなかった為に独り個別で卒業となった

因みに、皇帝シンボリルドルフの年上の従姉である（今回の取材で実姉であると判明したが）

さっ、閲覧申請に行かなきゃ（真顔

御忙しい中、取材を受けて頂いてありがとうございます

誘導バとしての仕事の傍ら、レスキューバとしての講習もうけておられるとか

「や、全然いいですよ。先輩も受けてたみたいですか？」

あ、ポレールさんですか？

彼女は一足早くレスキュー講習受けて、既に実際に活動してるとか残念ながら私は見に行けてないんですがね

「先輩は面倒見良いし、前々から気にしてたっぽいですからね。そりゃ講習受ければレスキューで控えられるってんなら受けますよ。」

ポレールさんに限らず、誘導バの皆さんは講習を受けているのが殆どだとか

受けていない方はスケジュールの関係で、事実上全員が受講予定だそうで

「良く調べてますねえ。ええ、みんな後輩達が無事で居てくれるに越した事は無いですからね。」

「後はやっぱり、ターフの上を走りたかって思いが無いでは無いですね…」

やはり、レースから離れてもそういう思いは強いモノですか？

「そりゃあ、やっぱりウマ娘ですから」

「個人差はあれど、ターフを去ったからと言って走る事から離れられ

るウマ娘というのは滅多に居ないと思いますよ」

ですよねえ

さて、現役時代の事をお聞きしても？

「と言っても、語れるほどのレースなんて…んー、日経賞くらいですかねえ」

条件戦やOP戦で戦歴を積み上げていった先  
シニア3年目での挑戦でしたね

「ええ、まあ、鳴かず飛ばずだった私とトレーナーの挑戦でしたね」

「あの一戦だけは、破れかぶれというか…色々振り切れてた状況だったんですよ、ええ。」

破れかぶれ、と言いますと？

「いやあ…お恥ずかしながら、当時の私はトレーナーの事いいなあって思ってたですわねえ…」

「既婚者だった事に気づいて、その…元々逃げで走るつもりではあつたんですが…大逃げしちやいましてねえ…」

あー…そういう…

「ええ、まあ。結果として逃げ切り勝ち出来たんですけどねー。こう、テンションというか、気持ちがあぶつり切れちゃった感じでね？」

「そこからはまた鳴かず飛ばずで、トレーナーは障害転向なんかも考えてくれたんですけど、どうにも気持ちが入らなかったんで…まあ、仕方ないかなって」

仕方ない、で諦めきれたんですか？

「走ってるうちに、自然と吹っ切れましたね。レースから離れるのもいい機会かなって」

「で、卒業して先輩に声をかけてもらって、今に至るって感じですね。」

成程

誘導バとしてのお仕事で何か変わりましたか？

「変わりましたよ？また走りたくなりました（笑）」

と、言いますと？

「走る為じゃないけど、ターフに戻って。後輩達がバチバチに競り合ってるの見てたら、うずいちやいましてね？ああ、走るのやっぱり好きなんだなって。」

ですか（笑）

では、お話はこの辺で

「おっと、ちよい待ち。ここで返しちやサービス足りないでしょ？」

は？

「せっかくなんで、先輩の事を色々教えちやいますよん」

良いんですか？

私としてはありがたいですが…

「良いの良いの、手始めに先輩の朝のルーティンから行きますかね」

「先輩ってさ、あのスマイレのアクセサリー大事にしてるんですけど…毎朝必ず、付ける前にアクセサリーに向かっておはようございますっ



て挨拶してるんですよ」

「アレはきつと送り主に言えないから代わりに言ってるんですよ！カワイイですよね！」

それはまた、いじらしいというか…

「でしょ？それに他にもあるんですよ。」

「先輩は寝る前にあぴゅっ」

あっ…ぽ、ポレールさんお久しぶりです（震え声

「この子は寝てしまったようなので今日はこの辺で」

えっ、いやあの

「このへんで」

アツ、ハイ

失礼しました（脱兎

今回は現誘導バのネコパンチさん、でした（震え  
取り敢えず…次回はちゃんと選びましょうか…

あ、どうもどうも。  
お久しぶりですね？

「記者さんですか、今日はどんな御用で？」

いやあ、少し気になる事がありましたね？

以前伺ったご友人の話、あれ、御自分の話ですよ？

「…おや、何故そう思われたの？」

いやあ、最近あなたの相方にお会いしましてねえ

で、話が具体的だったのもあって、間違いないかな、と。

「はっはっは、それならしゃーなしですわ。あ、ここからは言葉遣い崩  
しますね？」

あ、はい

というかあっさり認めましたね？

「いやあ、気づかれたらまあ、それはそれでって感じなんで。元々隠し  
てたってわけじゃ無いですから。」

それにしては顔立ちも結構変わってますけど？

それに腕の麻痺も、何かの後遺症なのは間違いなさそうですし

「あー、まあ、それはねえ。ま、これもいい機会っすかねえ」

「先輩と相方に色々あったってのは、もう調べが付いてるんですよ？」

それはまあ、調べれば出てくることですからね

しかし、そこに貴方は直接関わっていない事も調査結果が出てます  
一体何があつたんです？

「いやあ、若気の至りつちゆうか、ついカツとなつてやったというか  
…」

「まあ、相方が事故つて、そのチューンに先輩が関わつてたつてのはそ  
れなりに知られた話だつたんすよ、狭い世界でもあるんで」

そのようですね

しかし、それが一体…？

「いやねえ、相方に負けてたけど、事故で順位あがつた奴らのチームメ  
イトがね、イラン事言つてたのが聞こえちまつてねえ」

「ビビりがイキつて事故りやがった、とか。万年負けチームが無茶  
やつて滅茶苦茶にしやがった、とか。無責任なOBが無理させやがっ  
た、とか。」

「何にも知らねえ奴らが、無責任に好き放題言つてたのが聞こえて、  
プツツンしちやつたんすよ」

えっ、プツツンって

「いやあ、7人相手に殴りかかつて全員ぶちのめしたらお代わりき  
ちやつて（笑）」

ええ…？

「お代わりにボコられながら全員殴り倒したのは良かったんすけど、  
相方と先輩に迷惑かけんのも違うと思つてね、決着つけんべつてチキ  
ンレースを提案しまして」

チキンレースって、先にブレーキ踏んだ方が負けっていう、あの？

「そそ、それを断崖絶壁とまでは言いませんけど、ちよつとした岸壁でやりましてねえ。海に突っ込んでブレーキ踏まなかった俺が勝ったんスよ」

???

「相手、ブレーキ掛けたけど間に合わず転落。俺、ブレーキ掛けずにぶっ飛んで転落、勝利」

ええ…あなた、何考えてそんな真似を…

「自慢の先輩とダチを馬鹿にさせらんねえ、だけつすね」

「ま、転落した車から相手を救助した時にチツと無茶しましてね。そんな時の怪我の後遺症つすよ」

貴方馬鹿でしょ（真顔

「ええ、馬鹿ですとも。でもね、馬鹿だからこそ大事なモンは自分で決めて、そこを超えてきたらやりあうしかないでしょ」

野生動物みたいな判断基準ですね…

「誉め言葉と受け取つとききますよ。で、相手も頭が冷えたというか、肝が冷えたというか。俺が救助しなけりや死んでたヤツも居たんで、素直にこつちの言い分を呑んでくれましたよ。」

そりやそうでしょうよ…

「いうだけ言ったら俺は気絶したらしいつすよ？んで、相手の一人に

病院の院長の息子が居ましてねえ、運び込まれました〔笑〕

明らかに笑い事じゃ無いんですが…

「はっはっは、んで、目が覚めたら包帯まみれで、顔にも傷入ってたんで整形手術で傷消せるけどどうする？って聞かれました」

「金は出せんぞって言ったたら、むこうが持つから手術受けろって言われたんで、折角だからちよいとばかりイケメン方向にしてみらいますね？」

「で、何度か手術して、その間は当然入院なんで暇で暇で、思い付きで中央のトレーナー資格試験の勉強しましてね」

まって、なんで行き成り飛んでるんですかね？

「あー、ちよいちよいつるんでた先輩好き好き大好きリコピンが勉強してたなって思い出したんで何となく？」

まって、まって

そのリコピンって、もしかして…

「ん？樫本理子ちゃん、通称リコピン。いやまあ、俺しか言っていなかったですけどね？」

いや、先輩好き好き大好きって…？

「えっ？」

えっ？

「あー…そっかあ、先輩も相方もニブ助魔王の僕人參だもんなあ…そっかあ……」

あの、それはもしかして

「関係者は概ね生暖かく見守ってましたよ？」

Oh…

「まあ、先輩は面倒見は良いけど流されやすかったし、面倒だなんてなるとすぐ流されてたのもあるのかねえ。相方はシンプルに鈍感過ぎだし、リコピンはポンコツだもんなあ。」

ぽ、ポンコツですか？

「あれ、知らない？リコピンあれで地図を見間違っって迷子になって先輩に救助されてたり、構内で教授さがして歩き回って力尽きて先輩に抱っこされてたり、買い物したは良いけど買い物かごの重さに負けて先輩に迎えに来てもらったり、図書館で資料を探して見つけても重さで引き出せなくて先輩に助けられてたり…」

うわあ…というか、基本セットで動いてたように聞こえるんですが？

「セットでしたよ？講義が違うから離れる事は多かったですけど、先輩面倒見いいから…まあ、その関係で俺らも仲良くなっただんすけどね」

「最初は先輩の後ろをちよこちよこ歩いてるなあって感じだったんですけどね、気づいたら今みたいになってましたねえ」

は、はあ…色々あったようで

「まーね。馬鹿な事もたくさんやりましたし。と、話もどしますか。」  
「で、折角勉強したんで試験受けるかあ、で受かりまして。地方の方でサブトレで入って、地方に出戻り前提で中央への推薦貰ったんすよ」  
「ははあ、直接中央だとサブトレーナーで過ごす時間が長くなりますからね」

地方で実績積むのを兼ねて推薦を、と

「そそ、俺なりの最短距離を走った訳です。で、中央へ移籍してみれば先輩がいるじゃないですか。苗字を母方に戻してたんでバレませんでしたけど。で、折角なんでバレるまでは黙っておこうかな、と」

「いたずら好きは直りませんか（苦笑）」

「ま、そうですね。あ、ちゃんとレオには全部話してますから。その上で一緒になりましたんで、それだけは誤解無きよう」

そこは誤解のしようがないです（真顔）」

「あ、そ、そう？ならいいんですけど。」

「ま、俺の話はこんなモンですわ。他になんか聞く事ありますか？」

「いやあ、もうおなか一杯です…」

「ま、次は飲みにと、お酒はやめたんでしたっけ？」

「ええ、スツパリやめましたよ。失敗が多かったのはありますけど、レオに迷惑かけたく無いんで」

「お熱い事で…じゃ、次は食事にでも行きましょうか  
旨い安い店があるんですよ」

「そりゃ愉しみだ。出来ればレオも一緒に行けりゃいいんですけど…」

子育てが忙しいでしょうしねえ？

「ですね、じゃあ、また」

ええ、また。

思わぬ情報過ぎて、扱いに困りますねえ…



いやあ、今回は取材を受けて頂いて感謝ですよ

「いえいえ、店子の皆さんは手が掛かりませんから…割合時間は自由になるんですよ」

それでは早速お話を伺っても？

「構いませんよ、何処から話したものでか…」

では、デビューからお願いしても？

「はい、ではそのように。私はデビュー戦で2着に敗れ、次戦では3着。そこから休養を挟んで翌年6月に改めて未勝利戦で3着…、もう勝てないのではないか、そんな思いが過ぎりましたね」

それは…メイクデビューを勝ち抜けるのはただ一人、それを考えれば仕方のない面もありますが、やはり重たいモノでしょうね

「そうですね…誰かひとりの勝利、その足元には敗者が犇めいている。それがレースというモノの本質、その一面でしょうね。」

「ですが、私達が走るのは敗者を踏みつける為ではないのですよ？」

「ただ、勝ちたい。誰よりも速く走りたい。それだけを見て走り出し、その背中に色々なものを背負って走り抜けるんです。」

その背から零れ落ちるモノがあつたとしても、ですか？

「そうです。私達は止まらない、止まれない。この胸に宿る熱が突き

動かす限り走る。私はそう思っていましたね。」

「あら…話がそれてしまいましたね、7月に4戦目に挑み、漸くの勝利。続き9月10月と条件戦ですが連勝、勢いに乗って京都新聞杯へと挑み、敗れました…」

「そこからは条件戦とOP戦で勝って負けて…12月の鳴尾記念への挑戦」

か  
ヤエノムテキさんとの激しい競り合いの末、ハナ差での惜敗でした

「惜しかった、もう少しだった。そう言われましたけど、私はそうは思えなかった。」

「続く次走の京都記念では一番人気に推されながらも10着と惨敗、更に次走の朝日チャレンジCで勝利を掴むも、その次走…京都大賞典でスーパークリークさんとミスターシクレンさんに惨敗、大差負けでした…」

あのレースではスーパークリークさんが頭一つ抜けていた、という評判から、終わってみれば食らいつけたのは独りだけ、でしたからね

「そうですね、流石はオグリキャップさん、イナリワンさんと並ぶ3強の一角と言う他ない結果でした（苦笑）」

高速ステイヤーとして頭角を現した辺りでしたからね…

「次走のOP競争で勝利しましたが、鳴尾記念、日経新春杯、京都記念と敗戦して引退。長かったような、短かったような…文字通り駆け抜けた時間でしたね」

成程…貴重なお話ありがとうございました

話はかわりますが、現在は何を？

「今はアパートの管理人をやらせていただいております」

ほほう、因みに何というアパートか聞いても？

「構いませんよ、馬脊館、と申します」

あつ（察し）

「何か？」

いえいえ、何でもありませんよ

それでは、ありがとうございます、ハツシバエースさん

「いえいえ、私も懐かしい話が出来て、少し嬉しかったですよ」

それなら、良かったです

では、シツレイシマス

ふう、私もまだまだですなあ…名前を聞いて思い出すとは

彼女が主導して名家の協力を取り付けて建てた、『新築の年季の入ったボロアパート』警備会社も裏手に常駐していた筈ですし…これは、入居者も…

いやあ、流石にこれは手が出ませんね

ま、仕方ないですね

トモダチと約束した件もありますし  
さて、次の取材先は、と

いやあ、皆さん良くお集まり下さいました。

今回は『彼女』の転戦でぶつかり、激戦を繰り広げた皆さんのお話を是非お聞きしたいと思ひまして、ハイ。

「よく言うぜ、激戦？ 影も踏めなかったレースが激戦か？ アタシらは背中を見る事しか出来なかつた。アイツがどんなツラして走つてたのかも知らねえんだよ……」

「Japanから来た悪魔だぜ、こつちからすりやあよ。」

「つていうか連戦しすぎだと思うの。 無茶苦茶するよねー、大人しそうな感じなのにねえ。」

「（貴女がそれを言うんですか……？）……聊か言葉は悪いですが、私達の総意に近いでしょうね。 それほどに、彼女の刻んだ傷跡は深く鮮やかなのです。 今でも鮮血が滴っていると錯覚するほど、ね。」

「そんな事よりあの子の蹄鉄欲しい！」

ハツハツハ、G1に限つても月に一度は出走、合間でG2G3にも出走とか正気の沙汰じゃないですよねえ……ええ、本当に。

普通、競争中に故障してしまつたら間隔を空けるもんじゃないんですかねえ……。 ま、気を取り直して……、まずはサンタアニタハンディキャップのお話をお願いします。

「Japaneseはニコニコ笑つても押しが強いのは分かるのかな？ 聞いてた話だと押しが強いってのは無かつた筈なんだがよ。 まあいいさ、先ずはアタシからだな。」

アタシは前年からの連勝をG1二つ含めて4に伸ばしたが、ストラブSで2着に敗れて仕切り直しの意味も込めて出走したんだ。

エクリプス賞年度代表にもなったのもあってね、勝ちが欲しかった。実力が評価されての選出だって胸を張って言いたかったからね。

ゲートに入っても落ち着いてた。ほかの子達も怖いと思う相手じゃなかったからさ…ま、それが油断だったってーんならその通りだろうさ。

ゲートが開いて、自分でも上出来なスタートを切ったと思ったのに…数歩先にアイツの背中があった。始まったばかりのレースだ、逃げウマ娘がハナを取るのも判る。

だから冷静に走ってた…中盤までは、な。 たった10ハロンのレース、だつてのにアイツは…アイツの背中はスタートから遠くなり続けた。

他の奴らもヤバいって気づいたんだろうな、アタシがスパートを掛けてから慌ててよ…結果は笑っちゃまうぜ？

アタシは後続に5バ身差をつけて二着だったが、アイツとアタシの差は12バ身だとさ。

走りなれた土が滑って、前に進んでないんじゃないかと思つたくらいさ。

レースが終わってトレーナーから「芝が本業だ」って聞いた時は口を閉じれなかったくらいには驚いたよ。

でもま、アイツの背中を見たおかげつてのも嫌な言い方だがよ、BCクラシク連覇出来たのは多分…いや、間違いなくあの背中より遠い相手がいなかったからだな。

「アタシの話はこんくらいいさね。ほーれ、サクサク次いこうぜ。アタシだけ恥さらしつてのはムカつくしよ！」

貴重なお話ありがとうございます、デイズナウさん。

彼女の次走はメーカーズマークマイルステークス、レースレコード1:30.55の大差勝ちを刻み、更に転戦。

オールドフォレストターフクラシクステークスでもまたもやレコード1:45.32で大差勝ち…うん、そりや悪魔呼ばわりもされ

ますよね。

「次アタシー！ マンハツタンハンデキャップだね！」

アタシはまー、勝つて負けてであんまりパツとしない感じだったんだけどさー。香港まで遠征して負けた次走だったからさ、勝ちたかったんだよね。

うん、勝ちたかった…勝てないなあって思っちゃったんだ。あの子がゲートに入った時に「あ、これ無理だ」って思っちゃったんだよねえ…うん。

ゲートが開いて飛び出して、その時点であの子の前を塞げなきゃ勝ち目なんて残らないのにさ。

いやあー、あの子だけ追い風に乗ってるのかなってくらいグングン前にいっちゃってさー、頑張ったけど3バ身差で負けちゃった。

で、終わった後にあの子がシューズを気にしてたから、どうしたの？ って聞いてみたら「蹄鉄が大分ヘタってしまったって」って悲しそうに言うんだもん。

そりゃ、あんな走りを支えてる蹄鉄ならダメになるのも早いよね、って思わず言っちゃったんだけどさ。「特別なんです…ダメになっても捨てられないくらいには」なーんて乙女な表情になるんだもん！

可愛いよね！ すごいよね！ あの子絶対重たい女になるよ！

あ、それはともかく。いいなーって思ったからアタシもその蹄鉄欲しい！ どこで手に入るの？ って聞いたんだけど…なんか、曖昧…？ な表情で「非売品ですから」って言われちゃったんだよね。

あーあ、アタシも欲しかったなー。二ホンに行けばどうにかならぬいかなー？

「まー、こんな感じかなー。あの子が二ホンに帰る時はこっそりついて行くのかな♪」

何というか、独特な感性からのご意見ありがとうございました、

フオビドウンアップルさん。

連戦連勝、芝ダート問わずに大暴れする彼女の次走はユナイティッドネイションズハンデキャップ、ここでもレコード2：10・11で大差勝ち…。

うん、暴れすぎですよね…何故日本のトレセンは彼女を放流してしまったのか。

「じゃ、次はアタシかねえ。アルフレッド・G・ヴァンダービルトハンデキャップ…二ホンで言うところのダート短距離レースだ。」

トレーナーから聞かされていたのは、彼女は本来芝のマイル中距離が主戦場だ、って事。

最初は舐められてるのかって思ったけど、違った。彼女はただ、誰よりも速く駆け抜けただけ。芝もダートも関係ない、ただそれだけだったんだ。

アタシはパツとしない戦績だけど、それでもスプリント一本で走ってきたプライドがあった。

けど、そんなものは一瞬で踏みつぶされたよ。

ゲートから飛び出して最初に見たのは彼女の背中。横顔ですらなかった。

あつという間にゴールまで駆け抜けて行って…2着のアタシに4バ身半の差をつけて決着さ…。惨めだと思った、悔しいと思った。

けど、そんなものは全部吹き飛んだんだ。あの子の本当にうれしそうなの、楽しそうな力才にさ。

ただただ走りたいたいだけ、誰よりも先に、誰よりも速く。其処に居るあの子の周りに誰かが見えたような気がしたよ。

羨ましいと思った、かな？

彼女を支える誰かは、何時だって彼女の傍に居る。それを感じたからかもしれない。

「友人、仲間、恩師、思い人。多分、そういう人達と一緒に走って



る…いや、連れて行ってるのかな？　しかも全力で楽しんでるんだからタチが悪い。」

あー…彼女は故障からの復帰にあたって色々とおつたそうですからねえ。

そういうのも込みで、今の彼女なんでしょうね。

色々と参考になる見解をありがとうございました、ファイヴスターデイさん。

そして彼女の次走はフォーンスターデイヴハンデキャップ、レコードこそありませんでしたが6バ身差で悠々逃げ切り、このころになるとスターでありながらヒールでもあるという不思議な状態に。

「そうですね、彼女のファン層は両極端というか…ええ、その…圧倒的な蹂躪者としてのヒール的人気と、楽しそうに、嬉しそうに走る事への純粋な人気がありましたものね。　それでは私の番ですね。」

30戦以上のキャリアと前走のソードダンサーでの勝利を携え、マンノウオーステークスで相對する事になりました。　彼女の戦歴はトレーナーから教えて頂いておりましたが、渡米してから無敗という事実に私は恐怖と同時に高揚を覚えました。

だってそうでしょう？　彼女は『伝説』と並ぶ…あるいは超えているやもしれぬ傑物。　そんな相手と競える事は誇らしい事であり、誉と言えるのですから。

まあ、私の意見が少数派なのは理解していますが、ね。

マンノウオーは芝のミドル、彼女の得意とする距離にはやや長いとは言え、既に並み居る優駿を蹴散らした実績のある距離。

私もダートから芝に移って4戦して3勝、有利不利は無いとみていました。　油断無く、慢心無く。　全身全霊で迎え撃つ気構えだったのです…。

それすらも軽々と飛び越えるように、彼女は駆け抜けていきましたわ。　後のジャパンカップの時に教えて頂いた「最速の機能美」とい

う二つ名も納得です。

確か：オペラオーさん、でしたか？ 彼女が教えてくれました。

彼女の事を尋ねられたので知る限りを伝えると、自分のことのように喜んでいたのが印象的でしたね。

「正直に言えば、ジャパンカップではベストなパフォーマンスを發揮できたとは言えませんでした。 ですが、例えベストであったとしても勝てなかっただろうと思わせるほどに二ホンの皆さんは強かったですね。 彼女の強さが磨かれた場所だということにも納得がいきましたわ。」

成程：挑み続ける気概を持った、素晴らしいお話ありがとうございます。 ました、ウイズアンティシペーションさん。

そして次走のウッドワードステークスでは中盤で迫られるも更なる加速で見事逃げ切り、そして向かったブリーダーズカップ・ターフ

「あら、私の番ですね。 私は世界中でレースを走った関係で色々な国のウマ娘と走ってきましたけど：うん、最強の相手だったかな？」

私、色々な所を走りましたが、二ホンの芝はちよつと走りにくかったのを覚えてます。

テイエムオペラオー、メイシヨウドトウ、ステイゴールド、エアシヤカールの四人は特に印象的でしたね。

エアシヤカールとはその前のキングジョージで一緒にしましたし、ステイゴールドとはジャパンカップ後のドバイで差し切られましたし：ええ。

そういえば凱旋門ではエルコンドルパサーとも一緒でしたねえ：あの時は不甲斐ない結果でしたけど。 まあ、あの時のモンジュウが強すぎたのも印象に残ってますが、それ以上にエルコンドルパサーの

走りは思わず応援したくなっただけです。あ、コレは内緒で。

話がそれましたね…ええと、BCターフの話でした。私は中団に付けて普段通りに、自分に出来るベストの走りをしました。

最終直線でのスパートで捉えた、と思っただけですけどねえ…届かずクビ差で逃げ切られてしまいました。

競り合いに持ち込んで、一度は並んだんです。けど、彼女は三度目の加速をして…踏み越えて行きました。

レコードで負けたなら…仕方ないですよ。私のタイムも彼女が居なければレコードタイムだったんです。知ってました？

「彼女に負けて連覇はならず、レコードを出すも上回られる。踏ん切りもついて現役引退を決めたのはその辺もありますね。」

米国、欧州、香港にドバイ、アイルランドで出走。ついた渾名が世界を旅するウマ娘だった元ワールドチャンピオン、ファンタステックライトさん…ありがとうございました。

「いいのいいの、今は暇してるからねえ。どっかにいい男いないかなーってフラフラしてるタイミングだったから。」

「こんなユルイのが元ワールドチャンプかよ…」

「言動とレースは一致しないものですから…」

「そんな事より記者さん！ あの子が出国したらいいんだけどなんか知らない？」

え？ 確か日本行きチケットを取ってた筈ですよ？

まー、今頃は愛する人の元へ駆けつけてるんじゃないですかね。

「「「えっ!? あの子走る事意外に興味あったの!」「」」」

おお、流石は頭先頭民族のイメージですねえ…まあ、まだ結ばれてはいないようですが、どうなるかわからない感じですよ？

ライバルも多いですから。興味があるなら此方に連絡を入れてもらえれば多分会えますよ。（某苦勞人の名刺差し出し）

よっぽど興味が湧いたんでしようねえ、名刺をひったくって全員で駆け出してきましたし：ま、彼の周りが騒がしくなるかもしれない問題ないでしょ、多分。

彼女ら程のウマ娘が協力者として取り込めればクライアントにも利はある話ですから、多分諦めとともに納得するでしょうし、ね。

いやあ、彼に関わると誰しも面白い事になるのでたまりませんなあ。いつそ私もアタックしてみましようかw

さあて、次の予定は、と